琉球大学学術リポジトリ

第3回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

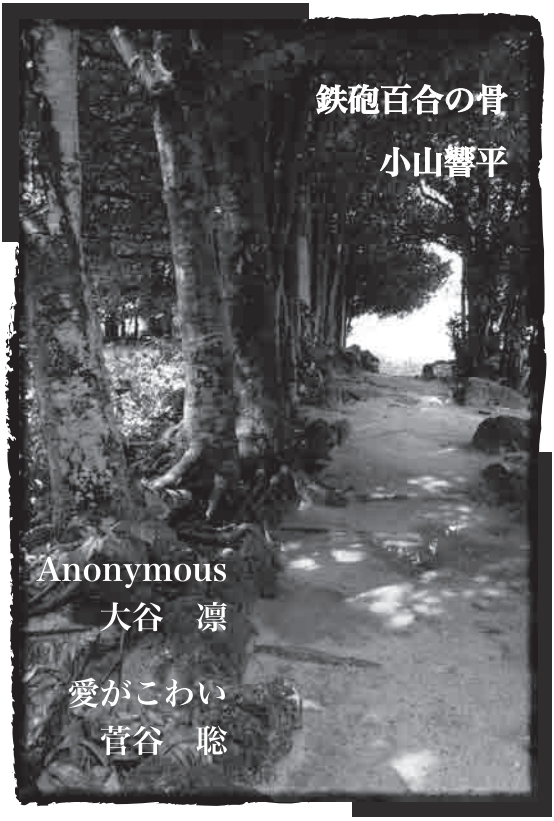
メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2015-03-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 琉球大学附属図書館編
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30495

第３回

びぶりお文学賞

2009

作品集



鉄砲百合の骨

小山響平

Anonymous

大谷　凛

愛がこわい

菅谷　聡

琉球大学

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号

第三回琉球大学びぶりお文学賞作品集

第三回琉球大学びぶりお文学賞　目次

受賞作　該当作なし

佳作

鉄砲百合の骨　小山　響平　6
（理学部物質地球科学・物理系二年次）

Ａｎｏｎｙｍｏｕｓ　大谷　凛　34
（法文学部人間科学科四年次）

愛がこわい　菅谷　聡　62
（教育学部島嶼文化教育コース三年次）

講　評　93

仲程昌徳　「第三回びぶりお文学賞講評」

山里勝己　「第３回びぶりお文学賞講評」

喜納育江　「第３回びぶりお文学賞選評」

選考経過　102

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。

装幀　上村　豊

第三回琉球大学びぶりお文学賞作品集

佳作

鉄砲百合の骨

小山　響平

冬。

島を越えていく風は肌寒くも、陽はなお暖かな、安らかな午後であった。

キヨは、築百年になろうかという平屋の、縁側に据えた安楽椅子に坐り、暖かな太陽を膝にかんじていた。

家の前に広がるサトウキビ畑は、夏植えを刈り取られたばかりで褐色にあせているが、閉じられたキヨのまぶたには、濃緑の葉先の、風に揺れる様がうつっている。

傍らの小さな布団には、五歳になる曾孫の、浅い寝息が聞こえる。

これでいい、とキヨは思った。

しかし。

時を得たからであろうか、もはや忘れかけていた、すなわち忘れることのできなかった、記憶

と感情のあぶくが、深い海の底からわき上がるように、キヨの脳裏へとよみがえり、行き場のない感情の高ぶりが、静かに口から漏れた。

「ユリが見たい」

それが、キヨの最後の言葉だった。

昭和十九年、戦中の生まれとは言われますが、私が物心つく頃には、あの戦争は終わっていました。それに、この島には爆撃や艦砲射撃はあっても、兵隊が上陸することはなかったそうですから、本島と比べれば、戦争そのものの影は、早くに消えてしまったのです。ですから、両親や祖母、三歳上の兄から、いろいろと聞きはしたものの、私には戦争の怖さというものが、本当のところ、よく分からないのでした。

それでも、戦後すぐの貧しさは骨身にしみていますから、なお辛かったという戦中の暮らしは、いったいどれほどのものだったのかと思います。

私の実家には、海に面した一町三反の畑がありました。家の屏風の前から、畑の中を、アダンとフクギの防風林をぬけて、海岸へと続く道が通っていました。

戦前は、畑はもうすこし大きく、サトウキビを山ほど作っていたそうです。ですが、私が覚えている限り、畑でまたサトウキビを作るようになったのは、戦後ずいぶん経ってのことです。戦後すぐ、私が物心ついた頃は、島中食べるものに不自由していましたから、ほとんどお芋ばかり

作っていました。

テッポウユリの名前を教えてくれたのも、兄でした。

兄は、年の割には背が高く、また賢い子でしたから、自然と周りには同じ年頃の男の子が集まって、よく遊びに出かけていました。

それでも、家にいるときはよく私の相手をしてくれましたし、春夏の天気の良い日には、畑の道を連れだって、よく海まで遊びに行きました。

その時分、私はまだ一人で海に行くことは禁止されていましたし、まだ四歳だった私には、途中にある防風林の暗がりが、なにか途方もなく怖ろしいものに思えたので、一人では海辺に出られなかったのです。そのくせ海はとても好きだったので、兄を見つけては「にーにー。うみ」と言って、海へ連れて行けとねだりました。

サンゴ砂の道は太陽に照らされると、白く光って照り返し、体を上下両面から焼かれて大変に熱いので、太陽が真上にあるような時には出かけませんし、そんな時間に兄に言っても、海へ連れて行ってはくれません。少し日の傾いた頃合いに言うと、兄は小さな網の袋を持ち出して「じゃあ、キヨ、行こうか」となるのです。

家から海までの道は、わずかに蛇行する緩い下りの、白いサンゴの砂の道です。

少し歩けば防風林に出ます。

海と陸をちょうど分ける防風林は、海側にアダン、陸側にフクギが植わっていまして、フクギ

は昼の光をよく防ぐので、林の中は暗く、その闇は、太陽を照り返す白いサンゴ砂の道を歩いてくると、一層深く感じました。

それに、真昼の防風林の中は木々の葉が日光に温められ、ちょうど蒸し焼きされるので、空気も外より重く、あまり気持ちの良いところではありません。林の中は蚊も多く、根や落ち葉の陰には、きっとハブがいますから、海へ行くときはいつも目をつむって息を止め、駆け抜けていました。

恐ろしい防風林をぬけて浜に出ると、深呼吸したようなすがすがしさを感じるものでした。

実家の前の海岸は、岩場と白いサンゴ砂と、死んだ枝サンゴの破片が混じった浜で、ずいぶんと沖の方まで珊瑚礁の内海が続いていましたから、よほど天気の悪いときでなければ、打ち寄せる波はとても穏やかでした。砂浜にはきれいな貝殻や枝サンゴの破片や海草の切れはしなどがたくさん打ち上げられていましたし、岩場の潮だまりに近づくと、小さな魚の群れやエビやカニが、私たちの足音に驚いて跳ねたり隠れたりして、飽きることがありませんでした。

私は磯に出てカニを追いかけたり、貝殻を拾ったりして遊びました。兄は、潮の満ち引きをちゃんと心得ていて、潮が満ち始める頃になると、私をアオサの生えている辺りに連れて行って、二人で夕飯の汁に入れるアオサを摘みました。その頃の私には、自分が摘んだものが家族の夕飯に登ることが、とても誇らしく思えました。

アオサの生えているところは、浜から少し遠い岩場で、潮の戻りの速い大潮の日には、摘んでいるうちに、足元にピチャピチャと波が当たりました。すると兄は、収穫を入れる網の袋にまだ

アオサが少なくても、アオサ摘みを切り上げ、浜へと戻るのでした。そんなときは、浜へ戻る私たちの歩みと、満ちてくる潮がちょうど同じくらいの早さなので、海に追いかけられているようで、少し怖く、また楽しくもありました。満ち潮が岩場の潮だまりに流れ込むと、底に沈んでいた白いサンゴ砂や、白い枝サンゴの破片が水の中を舞い、それはそれは美しいものです。私はその様に見入ってしまうこともありましたが、兄は浜へ戻れと私をせき立てるのでした。

そうやって浜まで戻り、先ほどまでいたアオサの岩場を振り返ると、すでに岩場は波にのまれて見えなくなっていました。程なく足元の枝サンゴの破片も波に洗われるようになると、私は波打ち際に立ち、サンゴの枝が波に洗われる様を飽きもせず眺めていました。

充分に遊び、夕飯のアオサも摘めた帰り道では、不思議と防風林の闇も恐くありませんでした。今にして思えば、傾いた日が斜めから差し込み、防風林の中を照らしていたからかもしれません。それになによりも遊び疲れと、空腹が、暗がりの恐ろしさをかき消してくれたのでしょう。

膝小僧をすりむくようなことはしょっちゅうでしたが、兄がよく注意していてくれたからでしょう、ごつごつした磯で遊んでも、私は一度もひどい怪我はしませんでした。兄は潮にいつも注意していましたし、毒やトゲを持つ危ない生き物がいれば、兄はその生き物の名前と、どうして危ないかも教えてくれました。毎日のように浜へ行くと、とても不思議な形をした流木が流れ着いていたり、見たことのない貝殻を拾ったり、大きな魚が潮だまりに取り残されているのを見つけてどうにかして二人で捕まえ、大いばりで持ち帰ったりしました。

あれは七月のはじめでした。いつものように海で遊んだ帰り道、フクギ林の中に、見慣れない花が一株、咲いていました。その花は、茎の背だけでもその頃の私より高く、手のひらよりも大きな白い花を三つ、たくさんのつぼみを付け、薄暗い林の中、海からの風に揺れていました。

生き物の名前を教えてくれるいつもの調子で「鉄砲百合だ」と兄は言いました。「てっぽうゆり」私はオウム返しに繰り返しました。テッポウユリの長く伸びた花弁の形は、確かに鉄砲のようでもありました。私の背丈ほどもある茎と、茎を囲み包む、細くも丸みを帯びた幾枚もの葉はたくましく見えましたが、海風に揺れるたび、濁りのない花の真白さとあいまって、ユリは林の闇の中で不思議なほど儚くもありました。

私にはテッポウユリが、林の黒い闇の中で、白い花弁の内側に、銃の火種のような黄色い花粉の球をつけ、その闇に塗りつぶされないように、必死にあらがっているように思えたのでした。

その日から私は、海に行くたび防風林のテッポウユリの前で立ち止まり、ユリを見るようになりました。兄は、蚊に刺されるといけないと、なるべく私を林から遠ざけようとしました。

きっと、兄はマラリアのことも知っていたのだと思います。

その頃、この島ではまだ戦争の残していったマラリアが流行していました。食べ物にも事欠く頃、マラリアの薬にまで手が回るはずもなく、多くの人が犠牲になりました。

もしかしたら、いえ、きっと私と兄は、あの防風林の中にあまりにも長くいたので、マラリアを持った蚊に刺されたのでしょう。

七月の中頃、私たちは二人ともマラリアにかかってしまいました。

マラリアにかかると、恐ろしいほどの高い熱がでます。それも何日かごとに、ひいたりあがったりを繰り返すのです。体が黄色くなり、小水は真っ赤な血の色になりました。

兄と私は、一つの蚊帳の中に寝かされました。同じような調子で熱の上がり下がりがあったので、熱が出ている間は、苦しくて話すこともできないのですが、兄は熱が下がるたびに、早く治して、また海で遊ぼうと言ってくれました。

四回目の高い熱が出たとき、もうろうとする意識の中で、お医者さんが来ていることに気づきました。

胸に当たる聴診器の冷たさと、熱を測るのか首筋に当てられた手の感触があり、お医者さんは「この子は大丈夫だ」と言いました。

大丈夫なのかと私は思いました。ですが、その言葉を聞いた父が「あの戦争を生き延びたのに、この子は」と言いかけ、父が祖母にひどくしかられていました。その意味が分からないまま、大人達のやりとりを頭のどこかで聞きながら、また眠りに落ちました。

それから三回熱が上がりましたが、七月の終わりのある朝、熱は完全に下がりました。

芋がゆを持ってきてくれた母に、隣に寝ていた兄がいないことを尋ねると、母は何も言いませんでした。

七つになったばかりの兄は、八月を迎えることができませんでした。子供は一度、家の近くに葬ると決まっていたので、家の脇の畑に、石を置いた小さなお墓が作られていました。

安らかな午後であった。

小さな布団で眠っていたキヨの曾孫は、キヨが不意に発した最後の言葉をとらえていた。五歳になるかしこい少女が眠い目をこすりながら、曾祖母のいすに近寄り、一言「ゆり？……お花？」と尋ねると、すでに力の抜けたキヨの体は、その主の首をゆっくりと頷かせた。

あるいは、それはキヨの意思であったか。どちらにしろ、大好きなキヨばあが、自分にお願いをしてくれるそのことが、少女にはとても嬉しかった。だが、曾祖母求めているのがどのようなユリなのか、それがどこにあるのかも、少女には分からない。

「すこしまっててね」そう言うと曾孫は、大人を呼びにどこかへと駆けていった。

子供の頃の七年は、今の歳の七年と比べると、とても長いものでした。あのマラリアから七年、私が中学に上がる頃には、二人の弟と一人の妹ができましたし、戦争で壊され小屋同然だった家も、何度か大工さんに入ってもらって、ようやく家らしくなり、新しいお墓も建てられました。それに、まだ半分にもなりませんでしたが、畑にはサトウキビも植えるようになりました。毎年、サトウキビを刈るたびに、家が少しずつ立派になり、食べるものもほんの少しずつ豊かになっていきました。

そして、私が中学校に入った年の八月、旧暦の七夕に、兄の洗骨をすることになりました。
家の脇の畑に、七年の間置かれていた兄のお墓がなくなることは、私には少し寂しかったのですが、土にまみれた兄の体を洗ってあげると考えれば、むしろもっと早くやるべきだったとすら思えました。

神人のお婆さんが呼ばれ、簡単な祭壇を作ると、祈りごとをしました。父が墓の上の石をどけ、土を掘り返すと、やがて朽ちた木の柩が出てきました。柩はつぶれて土と混ざっていましたが、父が丁寧に土と木の破片をどけていくと、やがて兄の骨が見えてきました。祖母と神人さんは、骨に日の光が当たらぬよう、日傘を穴の上に差していました。
兄は、おそらく生きていたときのほぼそのままに、土の中で骨になっていました。父はできるだけ丁寧に土を払うと、穴から上がって母から日傘を受け取り、代わって母がその穴に入りました。
母と祖母は、用意していたタライにはった逆水で、兄の骨を清めていきました。まず頭の骨を洗い、母が胸に抱きました。のどの骨や背骨、腰骨、腕や脚の骨は、子供のものと言ってもなかなか大きいのですが、手のひら足のひらの骨は細くて小さく、逆水の中で洗われる様子は、ちょうど波打ち際の白いサンゴの破片のようでした。
兄の頭を抱きながら、穴の中で骨を掘り出し洗う母が、とても大変そうだったのと、純粋に兄の頭を抱きたいと思い、私は母に兄の骨を預けてほしいと言いました。

母は渋りましたが、祖母と神人さんが、もうできることではないからと、私に兄の骨を抱かせるよう勧めました。

母はただ「大事に」と言うと、私に渡してくれました。

あの背の高かった兄の頭は、思っていたよりもずっと小さく、軽いものでした。

七年で、私は兄の背を大きく追い抜いていたのでした。七歳で死んだ兄が行くことのできなかった中学にも進み、短くおかっぱにしていた髪も、今は背中まで伸び、同い年の娘より早く、月の障りを迎えるようにもなっていました。私の心と体は、確実に七年分の時間を刻んでいたのです。ですが、兄の体は七年前のあのときのままで、時間と土に洗われるうちに、波打ち際のサンゴの破片のように、白く、そしてどこか寂しいものになっていました。

兄の頭蓋の小ささと軽さが、私にとっての死でした。

死とはこういう物なのかと私は思いました。流れていく時間に取り残され、時間に洗われることで、サンゴの枝の破片のような、小さく、軽く、寂しい物になってしまうことなのだと。そして同時に、静かな安堵さえも感じました。

それは、テッポウユリでした。兄の骨の白さは、サンゴの破片のようでもありましたし、テッポウユリの白い花弁のようでもありました。時間に忘れられ、どこか寂しい物になってしまっても、暗い林の中に咲くユリの花弁のように、儚くとも強い何者かになれるのなら。もしなれるのならば、テッポウユリのようになりたいと私は思いました。

兄の骨はすべて洗い清められ、足先の骨から厨子甕へと収められました。最後に頭蓋骨と、ま

だ小さなのど仏の骨が一番上に置かれ、甕と同じ焼き物の蓋がされました。
父が手早く掘り抜きの仮墓の後を埋め、私たちは歩いて十分ほどの所にある本墓まで甕を持って移動しました。甕は母が持っていきました。
本墓では、蓋石を開ける前に祭壇を作って、神人さんがさきほどの仮墓を掘る前と同じような祈りごとをしました。それが終わると父が持ってきていた金梃子で蓋石の周りの漆喰を崩して、お墓を開けました。祖母は、お墓の中をのぞき見てはいけないと、私や弟、妹たちに言いましたが、もしのぞいたとしても、暗くよく見えなかったでしょう。父は母から甕を受け取るとお墓に入り、中のどこかへ甕を置いて出てきました。
漆喰で、再びお墓の蓋石を閉め終わる頃には、ずいぶん日も傾いていました。行きとは違う道を通っての帰り道、私たちは普段あまり通らない道から、家から離れた浜に出て、海水で体を清め、浜沿いに家へと向かいました。
ちょうどその時間は満ち潮で、波打ち際の枝サンゴが、兄の骨のように波に洗われていました。兄の骨のようなサンゴの破片は波に洗われ、やがて細かい砂になり、砂浜に、防風林や畑や道の地面になっていくのでしょう。波に揺さぶられる白いサンゴの枝を一本拾うと、それは確かに、骨のように見えました。
波打ち際を家の前の浜まで歩きました。兄と遊んだ浜は、七年前と少しも変わらず、防風林の中の道わきには、七年前と同じ場所に、七年前と同じように、テッポウユリが咲いていました。

冬の、安らかな午後であった。
キヨの曾孫はとても賢明な娘で、曾祖母の願いを叶えるためには、自分で外に花を摘みに行くよりも、大人の力を借りた方がずっと早いことを理解していた。
ほどなく、少女は自分の母を、すなわちキヨの孫を台所で見つけ、キヨがユリの花を求めていることを告げた。

実家のサトウキビの栽培がうまくいくようになったので、私は高校までは出ることができました。
マラリアにかかって以来、私にはテッポウユリが、触れてはならない怖ろしい花のように思えたのですが、兄の洗骨をしてからは、兄の分まで、テッポウユリのように強く生きなくてはならないと、思うようになっていました。その頃は、どこかへ出かけるたび、テッポウユリが咲いてないかとさがしていました。
高校二年生のとき、港の近くで見慣れないユリを見つけました。おおまかな形はテッポウユリそのものなのですが、株も花もひとまわりほど大きく、花弁には赤黒い筋とわずかな斑点がちらばり、葉は剣のように尖り、テッポウユリのような丸みがありません。
私は、その花に興味がわきましたが、抜くわけにもいかず、特徴をよく覚えて帰り、学校の図書館で調べました。
どうやら、そのユリは、タカサゴユリという、テッポウユリにごく近い花であることが分かり

ました。
何年か経つうち、私の実家の周りはタカサゴユリばかりになり、元からあったテッポウユリは、あまり見られなくなっていきました。

高校を卒業してからは、家の仕事の手伝いをして、二十二歳で嫁ぎました。
まだ早いというも友人もいましたが、夫は私を大切にしてくれましたし、また大変な働き者で、二町の畑をよく世話して、戦争の爆撃で焼かれた家を元通りに建ててしまうほどでしたし。義母との仲もうまくいきましたから、この結婚は本当に良い縁でした。
嫁ぎ先の家と私の実家は、ちょうど島の反対側で、港からも随分と遠かったので、私が嫁いだころにはまだタカサゴユリの姿はなく、あの懐かしいテッポウユリが随分残っていました。それにその辺りのテッポウユリは、野原や林の中で数百株がまとまって咲くので、それはみごとなものでした。
家の近所にも、春から夏にテッポウユリの咲く林がありましたから、夫と私は少しの時間を見つけてはそこに出かけ、二人でユリを眺めていました。
夫は、そんなにテッポウユリが好きならと、花の終わった球根を林から掘り起こして、家の裏手に植わっていたフクギの、少し日陰になっている根本に埋めておいてくれました。それからは毎年、庭でもテッポウユリが何株か、花を咲かせるようになりました。
私は結婚の翌々年に長男を、歳子で長女を、そのあと五年のうちに、もう三人の息子を産みま

した。一番下の坊やだけ、ひどく乳の飲みが悪かったのですが、それでも、五人の子供は素直に丈夫に育ってくれました。

私は、色恋から遠い娘でしたから、恋愛というものがよく分かりませんが、夫といると、ほかの誰へも抱いたことのない、何とも言い難い、良い心地がしましたから、もしかしたらあれが私の初恋だったのかもしれません。それに、この家で夫と過ごした時間は、本当に何よりも大切なものなのです。

「ユリの花？」キヨの孫は、我が子の言葉を繰り返した。

昼食の後の皿洗いの手を止め、流しのタオルで手を拭きながら、少女の母は娘の顔をのぞき込んだ。

「そう、お花」キヨの曾孫に当たる少女は、大変な使命を帯びているように誇らしく言った。

「ユリの花って言われてもねぇ、時期じゃないし。ひいばあは、本当に見たいって言ったの？」

「うん」と少女。

「そう、それじゃあ、ひいばあに聞いてみようね」そう言うとキヨの孫は、我が子の手を引いて、安楽椅子のある縁側へと向かった。

冬の、安らかな午後であった。

忘れることもできません。昭和の五十五年の十月の晩でした。私が嫁いで十六年目ですから、

一番上の子が中学の二年生でした。
虫の知らせというのでしょうか。真夜中にふと目が覚めたのです。その後はなぜだか寝付けず、隣に眠る夫の寝息を聞きながら、ぼんやりと天井の板目を見ていました。
すると突然、隣に寝ていた夫が、ひどく大きな声で「ううっ」とうなりました。その声があまりにも尋常でなかったので、私は夫を揺り起こそうとしました。「お父さん、お父さん」と、幾度呼びかけても全く返事がありません。体を揺すっても、眉一つしかめないのです。顔色も青白くなっていきます。これはただ事ではないと、義母と子供達を起こし、救急車を呼びました。救急車が来るまでノドがつぶれるほど夫のことを呼びましたが、どうしても目を覚ましてくれません。
十分ほどして救急車がついたときには、すでに夫は心停止していました。救急隊の方々が、一生懸命に心臓マッサージをしたところ、夫は一度呼吸を取り戻したようにも見えましたが、結局、それきりでした。
お医者さんが言うには、脳溢血だったそうです。

家での夫の葬儀は、私が以前から聞き及んでいたように行われました。義母が親戚と、近所の互助会と青年会に連絡し、数刻の間に準備が整えられていきました。
義母は青年会の若い衆にいろいろと指示を出していましたし、子供達も、良く葬儀の準備を手伝っていました。

神人さんが来て、私達は一の間で、夫の体を清めました。夫のたくましい体から、血の気と生きた弾力が失われているのを、さらし木綿越しに感じました。

義母は渋りましたが、夫は火葬にされるとの事でした。

時代の流れとでも言いましょうか、この島にも火葬場ができていました。

私にとって、洗骨の経験と言えば、ほぼ土葬のような兄の洗骨だけでしたし、その経験は大切な物でこそあれ、決して怖ろしくも、穢らわしくもないものでした。ですが、聞くところによると、遺体を柩のまま墓に納め、数年かけて風化させる本来の弔いのやり方では、時には遺体がきれいに骨になっていないこともあり、洗い手の女性に、ひどい苦痛を強いることもあったそうですから、私より一回り上ほどの女性達が熱心に、洗骨の反対運動をしていたのは、当然の事と思えました。

もちろん、昔からの洗骨を変えたがらない人もいましたが、法律で、衛生上の対策として、遺体は火葬しなければいけないようになってからは、ほとんどお墓での風葬はされていませんでした。

通夜の寝ずの番と、翌日の葬儀が終わり、夫の柩は霊柩車で、私たち家族親戚一同は歩きで連れだって、火葬場へと向かいました。

火葬場で炉に入れられる直前に、柩の窓から見た、夫の最後の顔は、今でもはっきりと思い出せます。

火葬炉の金属製の扉はとても厚く重そうでしたが、閉まるときにはほとんど音がしませんでした。火葬場の係のかたが、扉の金具をしっかりと留め、ガスの炎が付けられました。

私たち家族と親戚は、炉の横の待合室に通されました。

夫が焼かれている間中、私は兄の洗骨を思い出し、七年後の七夕に夫の骨は私が洗うのだと、頭の骨を抱き、手足の骨を清めるのは私なのだと考えていました。土の中に埋められていた兄の骨は、土を洗い落とすという意味合いが強かったと思えました。対して火葬にされる夫は、土を払う必要はありませんが、焼かれるのはきっととても熱かったでしょうから、洗骨がたとえ七年後だとしても、よく湿らして、その熱を取ってあげなければと考えていました。

火葬場のかたに、夫の火葬が終わったと告げられ、私たちは炉の前に集まりました。

火葬炉の扉が開けられると柩の乗っていた台が、ゆっくりと引き出され「合掌」と火葬場のかたが言いました。

そして、焼かれた夫の骨は、私の思っていた姿ではありませんでした。あのたくましかった夫の体は、頭も腰も、手足の骨もすべて、ガサガサに崩れ、どれがどこの骨か、ほとんど見分けがつかなくなっていました。これでは、夫の頭を抱くことも、火葬の熱をぬぐってあげることもできません。骨灰の色は、サンゴよりもなお白く、また所々に黒いものが混じっていました。

その様は、私が思っていた遺骨の様子から、あまりにもかけ離れていました。波間に躍る枝サンゴや、真白いテッポウユリのような、兄の洗骨の時に抱いた頭蓋の感触こそが、私にとっての死でしたが、火葬されバラバラに砕けた夫の骨は、あまりにも乱暴に、唐突に過ぎ、夫の死を私

に突きつけました。
骨箸が渡され、私と義母は、厨子甕に夫の骨を納めていきました。まるで、かまどの燃えさしのようになってしまった夫の残骸は私たちに触れることのできないほど、熱く焦げたものになっていました。
私が夫の骨の様に呆然としたまま、葬儀は全て終わりました。

義母は聡明で、強い人でした。
私は、家と畑を長男に継がせるにあたり、相続税は借金をしてでも工面しようと言いました。義母と、今は亡き義父が戦争を通して守り、夫が受け継いだ二町のサトウキビ畑は、減らすべきではないと考えたからです。
義母は、私の考えをたしなめました。借金をして相続税を払っても、その利子は年々ふくらむ。確実に返せるあてもないし、子供達はまだ学校に行かせなければならない。それに二町の畑は、私たちの手に余るから、いっそ一部の畑を売って、それを相続税に充ててしまおうと言いました。
私よりよほど長く、戦中もこの家と畑を守ってきた義母のその言葉には、従うしかありませんでした。今にして思えば、大黒柱を失ってもなお、無理をして借金をしていたら、結局はもっと多くの畑を失っていたかもしれません。それに、畑を減らしたくないという私の思いは、単なる感傷でしかなかったのかもしれません。
サトウキビの畑を、一年で収穫する春植えから、一年半かける夏植えに変えたのも、収穫後の

サトウキビの株をそのままにして茎を伸ばし、再び収穫する株出しの回数も増やして、できるだけ手間を省き、ほかの仕事をできるようにしたのも、義母の提案でした。
私は小学校の給食作りの仕事を始め、義母は服の内職を増やし、二人してこま鼠のように働いて、五人の子供をどうにか学校に行かせました。
それからの数年はあまりにも忙しく、あれほど好きだったテッポウユリを見ることすら、なくなってしまいました。

縁側の日だまりの中で安楽椅子に腰掛け、キヨは眠っている。キヨの孫にはそのように見えた。
「キヨばあちゃん」と、優しく起こす調子で、しかし遠くなったキヨの耳に届くように、孫は言った。
「ユリの花がほしいの？」五歳の娘の伝言を疑っているわけではない。ただ、どのようなユリなのか、なぜ唐突にユリなのかを、孫は確かめようとした。
「おばあちゃん？」やがて、キヨの様子の普段と違うことに孫は気づいた。
その後は、よくある、じつにありきたりな光景であった。
むなしい呼びかけ、救急車、死亡確認。
通夜、葬儀、火葬。

忙しい七年は、あっという間に過ぎてしまいました。

長男は働きながらも大学に。長女は短大へ、下の三人の息子達も高校生で、ずいぶんと大きくなり、畑の仕事をよく手伝ってくれました。

その年は株出しのサトウキビを三月に刈り取っていたので、五月の時分には、畑仕事があまりなく、連休中は給食の仕事もなかったため、久しぶりに時間ができたのでした。すると、夫の洗骨をこの八月の旧七夕にすることと、近所の林の、テッポウユリが見頃の時期であることが同時に思い出され、思い出に浸りたくなった私は、ずいぶん久しぶりに、テッポウユリの林へと向かったのでした。

遠目に見ても林の木々は、七年では変わりようもなく、五月の陽光に照らされ緑色に輝いていました。林の入り口に目をやると、あの美しいユリの花が、これまた変わらずに咲いているようでした。

ユリに近づき、花を見ると、それは純白のテッポウユリではなく、花弁に赤黒い線を持つタカサゴユリでした。七年の間に、この林にもタカサゴユリが入ってきていたのです。私は、テッポウユリを探しました。一回り小さくても、真白い花に、黄色の花粉の球をつけ、まろやかな葉をたくわえた、あのテッポウユリが見たかったのです。ですが林の中は、骨灰を思わせる、白黒混じりのタカサゴユリで覆い尽くされていました。タカサゴユリの方が、株としても強いのでしょう、テッポウユリの頃よりも、遙かにたくさんの花が、薄暗い林の中で風に揺れていました。私にはあまりに多い花の数が空恐ろしく、その尖った葉先は、私を追いやっているように思えました。

言いようのない喪失感を感じながら、私は林を出たのでした。
家に帰るとすぐに、生前に夫がテッポウユリの球根を植えた、フクギの根元に行きました。それまで忙しさにかまけ、顧みることが少なくなっていましたが、私はそこにテッポウユリを求めたのです。そこには、たしかにテッポウユリの株が、まだ花のつぼみは見えず、葉だけの株でしたが、慣れ親しんだ、あの丸みを帯びた葉の姿がありました。
私は、その株が花を咲かせないかと、しばらくは気をつけていたのですが、畑が忙しくなるうちに、また忘れてしまったのでした。

八月、夫の洗骨の準備で、私と義母は大忙しでした。本島に下宿していた長男と長女を呼び戻し、島や本島はもちろん、本土の縁者まで呼び寄せたので、大勢の食事などの段取りをしておかなければなりませんでした。
義母と私と長女の三人で、山のような料理を作るのは大変でしたが、親子三代一緒の台所で料理を作るのも、また楽しいものでした。
長女がふと、私に、今年のユリはどうだったかと聞きました。長女が帰ってきた頃には、すでに林のユリの時期は過ぎていましたから、何となく聞いたのでしょう。ですが私は、どう言えば良いのか分からず、ただ、きれいだったよと答えました。すると長女が、そういえば庭のユリは咲いてたねと言いました。ここのところ、私はまた何かと忙しく、庭のユリを見忘れていました。長女のその言葉を聞くと、私は料理の手を止め、庭のユリを見に行きました。

庭のフクギの根本には、テッポウユリが植わっているはずでした。たしかに、そのユリの葉は、テッポウユリそのものでした。ですが、花が違っていました。夫が植えたテッポウユリは確かに真っ白な花弁でしたが、何年も経つうちに、どうにかして混ざってしまったのでしょう。タカサゴユリのような赤黒い線が花弁には走っていました。

私はそれまで、よそから来たタカサゴユリが、テッポウユリを追いやってしまったのだと思っていました。実際は違ったのです。テッポウユリは追いやられたのではなく、タカサゴユリと交雑し、似て非なるユリになってしまったのでした。

私は、嘆きも、泣き崩れもしませんでした。

夫の死が、兄の死とあまりにも違っていたように、ユリもその有りようが変わってしまったのです。私にはそれをどうすることもできませんでした。

ただ、花さえも変わっていく時代の中、暗い林の中で懸命に咲いていたあのテッポウユリの白さだけは、忘れないようにしようと思ったのでした。

洗骨の日、縁者が多く集まり、墓へ行きました。

神人さんを呼んだり、墓をあけたりは同じでしたが、洗骨のやり方は、火葬にあわせてずいぶん変わっていました。かつて、柩に入れた遺体を墓の中で年をおいたように、火葬された遺骨は、法要が済んだ後、一度墓に納められ、七年後の洗骨の時にもう一度墓から取り出すのでした。洗うのは、水や逆水ではなく泡盛を使うようになりましたし、それも浸して洗うのではなく、厨子

甕の中に直接振りかけるのです。
義母は、骨をどう洗うかではなく、皆で集まって骨を洗うことこそが大切なのだと言っていました。
夫の厨子甕に振りかけた泡盛は、乾いた砂にしみこむように音を立てて骨と灰に吸い込まれてしまいました。私はそれを、夫がうまいうまいと泡盛を飲んでいるのだと、思うようにしました。
決して、骨の面を伝いたれる泡盛が、タカサゴユリの花弁ぬらす雨粒に見えないように、しゅうしゅうと骨灰にしみこむ泡盛の音が、燃えさしのかまどに垂らした水の音に聞こえないように、ガサガサに崩れた夫の頭蓋を見つめながら、泡盛を飲む夫の赤らんだ笑顔を思い出そうとしました。
泡盛を振りかけるだけの夫の洗骨は、小さな骨を洗った兄の時と比べても、ずっと早く終わってしまいました。

ええ。
どのようにやり方が変わっても、洗骨は洗骨で、洗骨であることに違いはないと、私は、自分に言い聞かせました。夫の骨を洗ったあの日から、自分に言い聞かせ続けてきました。
それなのに、夫を火葬し、義母も同じように弔ったというのに、今になって私は、自身が火葬されるのが怖ろしいのです。
なにも、火で焼かれることが恐いわけではありません。火葬され、サンゴやテッポウユリのよ

うになれないことこそが怖ろしいのです。それがどれほど浅ましい望みなのか、私にはおよそ見当も付きません。それでも私は、テッポウユリのように、打ち寄せる波におどる枝サンゴ破片のようになりたいという気持ちを、どうしても抑えられません。

どうしようもない時代の移り変わりとともに、私のこの望みは本当に奇妙な物になってしまいましたから、私は、このことを子にも孫にも言いません。かけがえのない夫と、大恩ある義母を差し置いて、己だけは焼かれたくないなどという、この浅ましい望みは、口に出すことなくそちらへ持って行きます。

夫と同じようになれるのだと思えば、サンゴにもユリにもなれないこの怖ろしさを、あるいは乗り越えられるでしょう。

ですから、ああ、どうかお願いします。

私はもう一度だけ、あのユリが見たいのです。

キヨの死から七年。ユリが見たいという、キヨの最後の言葉を聞いた曾孫の少女は、すでに中学生になっていた。中一の夏休みも半ばを迎えたこの日、およそ半月ぶりに、少女は中学の制服を着ていた。

旧暦の七夕である今日は、家族親戚総出で、キヨばあの洗骨をするのだ。

洗骨と言っても、昔のそれのように、お墓に風葬した遺骨を逆水で清めるようなことはしない。焼かれた骨の一部を取り出し、泡盛でゆすいだり、骨壺に直接泡盛をかけたりするらしい。

「早くしなさい、みんな待ってるわよ」玄関から母の呼ぶ声。
「はーい」
返事をすると、こめかみのピンを鏡で確認し、少女は玄関へと向かった。
玄関には、祖母や大叔父をはじめ、多くの親戚が集まっていた。中には洗骨のために帰ってきた、本土で暮らす叔父家族の顔も見える。
「よし、行くか」三十人ほどの親類の、団長のように、もうすぐ九十歳を迎える大叔父が言った。
すでに旧家の玄関にさえ入りきらないほどの大所帯だが、さらに墓には、親戚の若い男衆がもう十人ほど、祈りを行う神人さんを連れて、先に向かっているのだ。
「あんたは、これを持ってね」
母が大きな花束を少女に渡した。菊やヒャクニチソウのありふれた仏花に、白く大きなユリの花が加えられていた。
キヨの葬式で、少女がひいばあにユリの花をあげると言い張って騒いだことは、親戚が集まったときの話の種だったが、それ以来、墓前には必ずユリが供えられていた。

家から少し離れた墓まで、八月の日差しの畑の中を、親戚連中の行列が、年寄りの歩みにあわせてゆっくりと進んでいく。少女と母は、その最後尾を歩いていた。
ふと、少女は母に言った。
「なんでキヨばあは、ユリが見たかったんだろう？」

「とても好きな花だったらしいわ」
母は続けた。
「おばあちゃんも大叔父さん達も、ひいばあが、畑のそばの林によくユリを見に行ってたって言うし。たしかに春には、近くの林に沢山ユリが咲くわよね」
「そうだね」
おそらく、母の言うとおりなのだろう。死の間際にキヨばあは、好きだったユリの花が見たかったに違いない。
少女は、抱える花束の、ユリの花に目をやる。すらりと尖った葉に、つぼみと白いラッパのような花が付いている。花粉の黄色と花弁の白のコントラストが美しいが、花弁のゴマを散らしたような黒い斑点が、少々気になった。
「林に咲くユリって、このユリなの？」
少女は母に尋ねた。
「え？」
母は聞き返した。娘の疑問の意図が分からなかったのだ。
「この花束のユリは、キヨばあの好きだったユリなの？」
「なに言ってるの、あんたも近所の林にこのユリが咲いてるのを、見たことくらいあるでしょ」
「それは、そうだけど」
確かに花束のユリは、林で幾度も見たことのある、あのユリだった。きれいなユリだとだと少

女も思う。しかし、花弁の斑点模様に、尖った葉、そしてなによりこのユリの大きさが、少女にとってのキョばあの印象と、どこか異なっていた。

キョばあがこの花を好きだということが、少女はどこか信じられなかったのだ。

畑の道を曲がり、林の中に盛られた土手の上の道を進む。土手の道の、人や自転車が通る所は、白いサンゴ砂が見えるが、両脇の下り斜面には、濃く草が生えている。トンネルのように両側から迫る木々が、太陽を遮って、空気は少しひんやりとしている。

少女の視界の端、土手の下に、一瞬、キョばあの姿が見えた。

「え」少女は思わず小さな声を上げ、立ち止まった。キョばあの見えたところに、一株のユリが咲いていた。花束のユリに似ているが、一回り小さく、細い葉先は丸みを帯び、花弁は一筋の線も、斑も入らない純白である。少女の目には土手の下の薄暗がりに、ユリの白さが栄えていた。

これがキョばあの欲しがっていたユリじゃないのかなと、少女は思った。

「お母さん」先を歩く母を呼び止める。

「今度はなに」と言って振り向いた母の腕に花束を預けると「少し待ってて」と、少女は土手の下へ降りようとした。

「待ちなさい」いつになくきつい調子で、母は少女を呼び止めた。

「少しだけ、あの花をとってくるだけだから」

「だめよ、あんな所へ降りて、怪我をしたらどうするの」

「でも、あんなにきれいなユリなんだもの、きっとキョばあの見たかったユリは…」

母は少女の言葉を遮った。
「この花束にはもう余裕がないし、一本だけ違う花が入ってるのもおかしいじゃない。それに」
母は少女に歩み寄ると、花束をわたしながら付け加えた。
「ユリはユリよ、ユリに違いはないわ」
そう言うと、母は歩き出した。親戚連中は道ばたのユリに気付きもせず、ずいぶん先へと進んでいる。その母の後を追おうと、少女はしばらく歩いた。
だが、母の後を追う少女の歩みはやがてとまり、土手の下に咲くテッポウユリを振り返ると、つぶやいた。
「そうかしら」

おわり

小山　響平（こやま・きょうへい）／理学部物質地球科学・物理系二年次

佳作

Anonymous

大谷　凛

いつものように研究室に向かう私の目に、ふとゴミ箱に無造作に突っ込まれた数枚の申請書がとまった。

「……何だ、これは」

普段なら気づくことすらなく通り過ぎていったような代物だが、その時の私には何故か無視してはいけないような気がしていたのだ。私は、周囲に誰もいないのを幸いと一番上にあった一枚を拾って丁寧にシワをのばした。

それは、禁書の閲覧許可申請書だった。この大学に収められている禁書は、世界に数冊しかない書物も多く非常に貴重であり、また同時に非常に危険なものでもある。物騒な魔術体系についての書物から読んだだけで気の触れるようなおぞましい詩篇まで、ありとあらゆる恐怖の詰まった人外魔境の領域だ。だから例え学内からの申請であっても通ることは滅多にない。最も、学内

であそこに足繁く通うのはシュリュズベリィ博士くらいのものなのだが。
名のある教授の懇願ですら容易くはねのける厳しい申請であるというのに、私が拾い上げたこれは何ともひどい代物だった。たとえこれがただの休学届けだったとしても蹴られたに違いない。
雨上がりの道の上でうっかり迷い出たミミズがのたくったような、「汚い」という表現が穏当に聞こえるような文字――かろうじてアルファベットであることは読み取れたが、解読には時間がかかりそうだ。この段階でゴミ箱に戻してもよかったのだが、私の気まぐれはこのメモを捨てることを思いつきもしなかった。
十分かけて、何とか名前と住所を読み解くことができた。申請理由の欄で苦労しなかったのはよかった。何しろ、何も書かれていなかったのだ。住所は村の名前がぽつりと書いてあるだけで、そして氏名欄には。
「『Ａｎｏｎｙｍｏｕｓ』。胡散臭いモーテルの台帳にだって書けやしないぞ、こんなふざけたこと」
偽名を使いたいのなら、せめてジョン・ブラウンとでもしておけばよいものを。
しかし、これは一体何なのだろうか。学生の悪戯にしてはウィットが足りない。彼らなら「シュリュズベリィ博士が異界から連れて帰った愛らしい犬の品種を調べたい」などともっと分かりやすくふざける。そして、かつてそのような悪戯を行った学生が、実際にシュリュズベリィ博士に異界の犬とやらを見せられてから真っ青な顔で退学届けを書き自宅で首を吊ったという噂を知らぬ学生はいないだろう。まあ、噂というものには尾鰭がついてくるものだ。残念ながら実際に

博士がそんな代物を見せたかどうかははっきりしていないし、あの学生はしばらくしてから退学届けも書かずにいきなり消息不明になっているのだから。
思考が脇道にそれかかっていると、ちょうどいいことに顔なじみの清掃員が通りがかった。
「ああ、ちょうどいいところに。これは一体何だね？」
私が手の中の申請書を見せると、彼は人懐っこい印象の丸顔を嫌そうに歪めた。
「ああ、それですか。いや実はですね、ここ一週間ほど毎日毎日出され続けてるんですよ、それ。門前払いしているってのに、しつこいったらありゃしません」
「学生ではないのか？」
「あれを入学させたとしたらこの大学の品位を疑いますね。さっさとピラミッドなり大英博物館なりに帰ればいいのに」
残念ながら、ハロウィンはとっくに終わりもうクリスマスの準備が始まっている。が、ただのいたずらにしてはどこかおかしい。
「そうか。なら、もし次に彼が来たら私を呼んでくれ。死者の蘇生はうちではできないとはっきり断ろう」
「ああ、それなら、事務の窓口が閉まる少し前に行くといいですよ。大体こいつは閉まる寸前に来ますから」
今の時期、その時間にはもう太陽は沈んでいる。かなり冷え込むこともあり、大抵の人は昼間のうちにすませられる用事をすませてしまう。学生の都合もあるから事務は五時まで開けてはい

るが、せいぜいずぼらな学生が申請の直前になって慌てて駆け込む程度だ。
次の仕事に向かう清掃員に礼を述べ、くしゃくしゃの申請書をきちんと四つ折りにしてポケットにしまってから私は研究室に向かって歩き出した。その時間に張り込むのなら、きちんと厚着していかなければ。
……何故私はこの奇妙な申請書に気をひかれたのか。何故これを書いた人物に会わなければならないと思ったのか。今になってもまだ分からない。だが、その時の私は確かに、この申請書を放っておいてはいけないと感じたのだ。

太陽が地平線の際にかすかに紅く名残を残す頃、窓口が閉まる5分前に彼はふらりと事務を訪れた。
清掃員の彼や、事務員が嫌がるのも無理はない。
身長はかなり低い。子供のようだ。父親のお古を勝手に持ち出して着込んだかのようなまるでサイズの合わない古びたトレンチコート、顔が見えないように深々と被った元の色も分からないほどボロボロのキャップ、かろうじて覗く顔や手には素肌が見えないほどにきっちりとくすんだ色の包帯が巻かれている。……いくらうちがオカルティックな話題に事欠かない大学だとはいえ、これは流石につまみ出すべきだろう、警備員。
彼は背伸びして申請書とペンを取り、そのまま床に座り込んで申請書を書き始めた。椅子がないため、彼の身長では台に届かないのだ。

「ああ、そこの君」
私が声をかけると、彼はこちらを見上げた。ぎょろりとした右目と数本の金髪が包帯の隙間から覗いている。……どうやら、エジプトの出身ではなさそうだ。
「これを書いたのは君だね」
ポケットから件の申請書を取りだして見せると、彼はあっさり肯いて申請書を書きながら答えた。
「そうだよ。でもダメだって。だから書き直し」
少年のような甲高い声だ。口元まで包帯で覆われているせいで少しくぐもっているが、それでもその声は私のところまではっきりと聞こえる。訛りはあるものの、きちんとしたアメリカ英語だ。やはり大英博物館から抜け出してきたわけではないらしい。
「申請理由が空欄だが」
「必要もなく申請しない」
「住所も不完全だ」
「そうとしか書けない」
「名前は？」
「なくもないけど、使いたくない」
……話にならない。ワシントンは指示が的確だったから無口でも許されたのであって、入れ歯もはめていないような子供が真似だけしたって尊敬を得られるはずもない。とにかく意味のある

返事を聞きたかった私は、言葉を変えることにした。
「名のある知識人ですらそう簡単に閲覧許可を得られないのだ、名前すらない君に閲覧許可が下りるわけがないだろう」
私がそう言うと、彼はあからさまに不機嫌を身にまとった。だが、彼の事情がどうであれ、あの禁書をそう簡単に見せるわけにもいかない。私が譲らずに彼を見つめ続けていると、根負けしたのか溜息をつきながらゆっくりと口を開いた。
「……ジョン、メラニー、ルーカス、マージョリー、メアリ、ネイサン、キム……」
十数人の男女入り混じった名前をまくしたて、最後にこう締めくくった。
「全部僕の名前だよ、多分。ちなみにファミリーネーム抜きね」
……私は馬鹿にされているのだろうか。
私が憮然と立っていると、彼は申請書を書き終えて立ち上がった。が、ちょうどその時に壁にかけられた時計が終業時間を示し、窓口の係員はこれ幸いとさっさとシャッターを下ろしてしまった。電気を消さないのは、私と彼がまだいるからだろう。
「……あーあ。間に合わなかった。次はもう少し早く来ようかな」
彼は書きあげた申請書を眺め、少し悩んでコートのポケットに無造作に突っ込んだ。ペンを台の上に放り投げ、わずかに足をひきずるような歩みでゆっくりと出口に向かう。
「待ちなさい」
私が呼びとめると、彼は足を止めて顔だけで振り向いた。今にも零れ落ちそうなグリーンの瞳

は、それでも理性と人間らしい感情を内側にとどめてじっと私を凝視した。
「何度出しても無駄だろう。禁書の閲覧が許されるのは、基本的に魔術や異界のものどもに詳しい人のみだ」
「……僕は、魔法使いじゃないから、ダメ？」
「そうだ」
私がうなずくと、彼は失望したようにうなだれた。
「どうしよう……ここなら、何かいい方法が見つかると思ったのに……」
彼はブツブツと呟きながら、事務室を出ていった。その後を追うように事務室を出ようとした私は、何かの臭いをかぎ取って思わず足を止めた。甘酸っぱい、脳髄にねっとりと絡みつくような臭い。悪臭ではない。それなのに、腹の底から本能的な不快感が湧きあがってくるような臭いだ。酔っ払いが路上にぶちまけた吐瀉物の臭いの方がまだ不快感が少ない。思わずゴミ箱を覗くが、清掃員の仕事ぶりを表して数枚の紙くずがお愛想程度に転がっているだけだった。となると、この臭いの元は彼ということになる。思わず足を止めた私に構わず、彼はそのまま夜の闇の中に消えていった。
事務員の話によれば、あれからあの少年が来ることはなくなったという。彼らにはしきりに感謝されたが、私は何故かかすかな焦燥感を覚えていた。
私の持っている手がかりは、このぐちゃぐちゃの申請書だけだ。調べてみたが、住所欄に書い

てあった村は地図にちゃんと載っていた。山間にある田舎村だ。車でも一週間はかかるだろう距離だし、列車やバスが通っているわけでもない。彼は一体どうやってここまで来たのだろうか。

「……気になる……」

書きかけの論文の上にペンを置き、研究室を出る。こんな気分では、とてもまともな文章など書けそうにない。

誰かがラジオをかけているのだろう、軽快なスウィング・ジャズがどこからか聞こえてくる。確か、今人気の曲だったか。甘やかな歌声と流れるようなピアノが私の耳を素通りしていく。

『――さて、ここからはニュースをお送りします。昨日、マサチューセッツ州の山奥にて複数の子供の遺体が埋められているのが発見されました』

ふと、私の耳にそのニュースの音声が流れ込んできた。

『遺体は死後数週間のものから半ば白骨化したものまで様々で、警察では同一犯の犯行と見て捜査を開始しています。身元の確認は現在行っている最中ですが、近隣のレンフィールド村では九歳から十二歳までの子供が連続で行方不明になる事件が発生しており、この事件との関連も調査されています』

レンフィールド。それは、あの申請書に書かれていた村の名ではないか。慌ててポケットから申請書を引っ張り出す。殴り書きではあるが、確かにレンフィールドと読めた。

今動かなければ、二度とあの少年には会えない。そして、この胸の暗雲を晴らすことはできないだろう。私はそう直感した。

「……一ヶ月ほどかかるかな」
有給休暇は、ぎりぎり足りるだろう。論文は……まあ、後で考えよう。どのみち、こんな中途半端な気持ちでは書けはしないだろう。
さて、事務室に行かなければ。

レンフィールドは、地図から想像できたことではあるが、本当に何もない田舎だった。
本来は素朴な村だったのだろうが、今は村全体がピリピリした雰囲気になっている。私がここに着くより先に遺体の身元が判明し、全てこの村で行方不明になった子供達であることが明らかになったからだ。この村の唯一の救いは、大きな街からそれなりに離れていたことだろう。こんな辺鄙なところまで来る野次馬は少なく、大半が警察と記者だった。
車から降りると、すぐに二人の警官が近づいてきた。
「すみませんが、身分証を見せて下さい」
指示に従うと、片方の警官が驚いたような表情になった。
「大学の教授が、ねえ。研究のつもりで？」
「いえ。ただ、『この村に魔女がいる』という匿名の手紙が届いたのです。例の事件のこともありましたので、一応見るだけは見ておこうかと」
「魔女、ねえ。ま、世間じゃ黒ミサ集団がいるだの悪魔のしわざだの愉快な噂が流れてますけどね。こないだうちにも来ましたよ、これは銀の星の陰謀だ、アレイスター・クロウリーを逮捕し

ろってね」
「私の記憶が正しければ、彼は既に亡くなっているはずですが」
「そんなのは俺の知ったこっちゃないなぁ」
それで職務質問は終わりらしく、警官が手をおざなりに振ってサインを出してきた。会釈してその場を辞し、村を散策する。明らかに村から浮いている私には記者も声をかけず、村人からは窓越しに猜疑と倦厭の視線だけがよこされる。なかなかに気の滅入る散策だ。だが、あの少年はもしかしたら故郷に帰っているかもしれない。どのみち、もう彼との接点はここしかないのだ。
と、道の向こうから一人の女性が何かを呟きながらこちらにふらふらと歩いてきた。
顔を伏せているため年はよく分からないが、少なくともうら若い娘ではないだろう。ぐしゃぐしゃの金髪にちぐはぐな服、よく見るとこの寒い中で靴も履いていないではないか。年頃の娘なら、こんな有様の自分を他人に見られるようなことは絶対にするまい。
「……大丈夫ですか。こんなひどい格好で、一体どうしたのです」
私が声をかけると、彼女は伏せていた顔を上げた。そのギラギラと輝く緑の瞳！　目が合った瞬間、寒さすら忘れるほどの怖気が私の背を走った。
「ジョン……」
地獄の底からわきあがったかのような、かすれた声。逃げたい、そう切実に思ったが、邪眼のような激しい視線が私をこの場に縛り付ける。
「……ぇして……」

ゆるやかな動きで、彼女が私の前に立つ。ここまで近くにいるというのに、目を合わせているというのに、私の視界は狂ったような緑の輝きに埋め尽くされて、彼女の顔が映らない。挨拶どころか会釈すらできないほどに、私は恐怖で凍り付いていた。

だから。

「かえせえええええええええっ！」

彼女が唐突に私の首を両手で締め出したのにも、全く抵抗できなかった。

「どこにやったの、わたしのジョン、かえしてかえしてかえしてかえして」

狂気をはらんだかすれた金切り声が、うるさいほどの心臓の音にかき消されていく。おぞましい視線も、こみ上げる息苦しさと共にだんだんと霞んでいく。

ああ、これで逃げられる。

消えかけた意識は、唐突に頬に触れた冷たい何かによって強制的に呼び戻された。力の抜けた私の体が、誰かに抱え上げられる。先ほど触れたのは、どうやら凍った路面だったようだ。私を支えている見知らぬ男が、必死に何かを叫んでいる。大丈夫か、と言っているようだ。耳鳴りがひどい。冷え切った空気を必死に吸い込んだせいで喉がカラカラに渇く。大丈夫じゃない、そう返事をしてやりたいが、私の口は酸素を求めて開ききりになっていて言葉を発してくれない。……苦しい。

「大丈夫か？　立てるか？」

今度は、ちゃんと声が聞こえた。私が首を横に振ると、近くの民家の壁にもたれかけさせてく

れた。息を整えながらぼんやりと見上げると、私を助けてくれたのは先ほどの警官だった。その肩越しに、遠巻きに眺める記者や村人が見える。
「落ち着いたか？　一体何があったんだ？」
「わ……分かりません。いきなり、叫ばれて、首を」
切れ切れの息の合間に返事を返していると、もう一人の警官がやってきて耳打ちをした。それに二言三言返し、彼はポンポンと私の肩を叩いた。
「ああ、ちょっと向こうが大変みたいだから、俺も応援に行かないと。車まで送るかい？」
「よろしく、お願いします」
私は警官に肩を貸してもらって、車まで戻った。後部座席に体を預けて体を休めるが、思考だけはぐるぐると何が起こったのかを理解しようとしていた。
何故、あの女性は私がジョンという人物を連れて行ったと思ったのだろう。この村の人間ではないから、というのは当てはまらない。私より先に警官や記者達がこの村に来ているし、彼らがあの女性に襲われたという話は聞かなかった。警官の対応からも、誰かが村人に襲われるという事態が想定されていなかったことが分かる。つまり、私が来る前にそういった事件があったとは考えられない。百歩譲って私に怪しい部分があったとしても、第一声が「返して」というのは不自然だ。普通なら「人殺し！」だとか、私が殺したという事実――無論犯人は私ではない。あくまで彼女の中での事実だ――を真っ先に口にするものではなかろうか。
コンコン。

私が目を上げると、若い男が窓の向こうからこちらをうかがっているのが見えた。ノックしたのは彼だろう。

立ち上がれるほどにはまだ回復していなかったため、私は窓を開けて声をかけた。

「何か、御用ですか？」

「ああ、今お話してもよろしいでしょうか？　私は『トゥルース・イン・ザ・ダーク』誌の記者ケイシー・ミードです」

ケイシーは名刺の代わりに缶コーヒーを差し出してきた。どうやら取材の見返りらしい。喉が渇いていた私は、苦笑しながらそれを受け取った。冬の冷気にさらされた缶はもう温くなっていたが、喉を潤すにはちょうどいい温度だった。

「構いませんが、私の名前は出さないでいただけますか。流石に上からお叱りが来るのでね」

『トゥルース・イン・ザ・ダーク』誌は、根も葉もないゴシップ記事ばかりであるということで有名な三流雑誌だ。ただ、その分事件やトラブルをかぎわける能力は高く、ミスカトニックが秘密裏に片づけたい邪神や魔術関連の事件もよくかぎつけて記者をよこしてくるため、関係者からは非常に嫌われている。唯一の救いは、彼らがどれだけ記事を書いても誰も信じない、というところか。とにかく、ミスカトニックで平穏に過ごしたいなら関わってはいけない雑誌である。本来ならば突っぱねなくてはならないのだろうが、彼には缶コーヒーの借りがある。気も紛れるだろうし、少しくらいならいいだろう。

取材相手のそういった反応には慣れているのだろう、ケイシーは名乗りすらしない私の態度に

嫌な顔もせずうなずいた。
「分かりました。ではブラウンさん、あなたは警察でも記者でもないのに、何故ここに来たんですか？」
「そうですね……一番分かりやすい答えは、天啓を得たから、でしょうか」
わざわざ嘘をつく理由もないが、本当のことを話す義理もない。職場のこととあの少年のことを伏せるようにしながら、言葉を選んでゆっくりと答える。
「天啓、ですか。それは一体どのような形で？」
「におい、です。脳髄が痺れるように甘ったるい、それでいて生理的な嫌悪感をもたらす――そう、あれは」
そう、あの臭いは。
あの事務室でのことを思い出しながら言葉にしていくと、あの時には出てこなかった答えがすとんと私の中に降りてきた。
「死の臭い、でした」
「死の、臭い……」
「もしかしたら違うのかもしれませんが、私にはそう感じられました」
「では何故、この村に？」
「ラジオで、この村の事件が流れているのを聞きました。その時に、『ここだ』と確信したんです」

「なるほど。それで、その臭いについてはどうお考えです？」
「さあ。分かりません。ですが、私はここでその真実を見出さなければならないと感じています」
「なるほど。ありがとうございます」
「ところで、先ほどの女性は誰なのでしょう。警官も手を焼いていたようですが……」
何の気なしに聞いてみると、ケイシーは律義に手帳をめくって情報を教えてくれた。
「アリソン・マクミラン。ジョンという息子と共に元夫から逃げてここに移り住んだようで、自分が息子を守らなければとずっと気を張っていたようです。息子は七年前に山中でグリズリーに殺されてしまい、それ以来精神を病んで自宅に引きこもっていたそうです。実は私も三日前に彼女と話をしたんですが、襲われなかった代わりにまともに話もできませんでした。いやぁ、目がらんらんと魔物のように輝いていて怖かったですよ」
流石はゴシップ誌の記者。あのような状態の女性にまで取材を敢行するとは、まっとうな人間なら遠慮するところだろう。その鋼鉄の心臓には感心する。見習う気は全くないが。
「……しかし、何故彼女は七年前に熊に殺された子供を返せと私に言ったのでしょうね」
「さあ。案外、ジョン君の霊があなたに憑依しているのを見たのかもしれませんね」
そんな馬鹿な話があるものか。
それからしばらく話をした後、ケイシーは礼を言って去って行った。……このことが大学にばれなければいいのだが。
しかし、話し込んだせいで疲れてしまった。流石にもうこれ以上村を見て回る気分にはなれそ

うにないので、少し早いがこのまま休むことにした。

ドン、ドンという鈍い揺れに、意識が揺り起こされる。目を開けると、窓の向こうから緑色の目がこちらを見ていた。

「――！」

「ねえ、開けて」

恐怖に凍りついた私に、その人物が声をかける。それは、あの少年のものだった。

「……どうしたんだ？」

「前に、会った、よね。お願い、手伝って。もう、腕が上がらない」

車から降りると、あの時よりも強くなった死臭が周囲に濃く漂っていた。まだ夕食を食べていなくてよかったと私は密かに思った――もし食べていたら、吐いていた。

「手伝うとは、何を？」

「家に、帰る。開いてるけど、開けられない。ドア、開けて」

以前よりさらに要領を得なくなっている答えに私が首をかしげていると、彼は勝手に歩き出した。いや、歩くというよりは前に進むといった方が正しいかもしれない。左足は完全に動かないようだ。右足も、どこか動きがぎこちない。本人の言ったとおり、両腕は力なく垂れ下っているだけでバランスも取りにくそうだ。

「怪我しているのか？」

「違う。もう、動かない」
この状態で倒れれば、もう自力で起き上がることはできないだろう。それが分かっているから、彼は慎重にゆっくり動く。幸い、風が強くなってきて警官や記者達もどこかに引き上げている。彼が目撃されることはおそらくないだろう。私はコートの襟を立てて風上に立つようにしながら、黙って彼の後をついていった。
少年が足を止めたのは、先ほど私がアリソンに襲われた場所にほど近い一軒の家の前だった。
「ここ。開けて」
「……いいのか？」
「いい」
私はため息をついて、ドアノブに手をかけた。かすかにきしんだ音を立てて、玄関はあっさりと開いた。誰もいないのだろうか。灯りはなく、暖房もつけられていないのか外と大して気温が変わらない。それでも風が吹き込まないだけ外よりはましだ。少年が入ったのを確認してから、私も中に入ってドアを閉めた。
「ここが、君の家か？　家族は誰もいないのか？」
私の問いかけを無視して、彼は奥に進む。
家の中は、まるで空き巣にでも入られたかのようなひどい散らかりようだった。椅子は倒れ、そこかしこに服や割れた食器が散乱している。窓からの月明かりくらいしか光源がないものだから、少年のようにすり足で移動しなければとても動けたものではない。明かりがつかないか試し

てみたのだが、電気も止められているのかつく様子は全くなかった。台所を通り、恐らく地下室に通じるのだろう階段をさらに慎重な足取りで降りる。ここから先は、完全な暗闇だ。私も、彼にぶつからないよう気をつけながら慎重に降りていく。

「……このドア」

足を止めたのだろうか、先ほどよりも近い位置で少年の声がする。私がそっと手を伸ばすと、木の壁に指先が触れた。そのまま探っていくと、やがてノブを見つけた。軽くひねると、これも鍵がかかっていないらしくあっさりと開いた。

「すぐ左に、棚があるの。一番下の箱に、懐中電灯がある」

言葉通り、部屋に入って左の方に手を伸ばすと何かに突き当たった。しゃがんでさらに調べると確かに箱がある。手さぐりで中のものに触れていくが、一向にそれらしきものが見つからない。

「懐中電灯なんて」

どこにもないぞ、そう言おうとした矢先に後頭部に衝撃が走り、私は再び意識を失った。

芯まで凍えるような寒さとズキズキと疼くような痛みで目が覚めた。

まだ、意識がはっきりとしていない。それでも何とか現状を把握しようと目を開くが、開いた先も暗闇だった。……いや、どこからかかすかに光が漏れている。痛む頭をおさえながら、私は光の見える方に向かった。

「……地下室？」

光は、正方形を描くように床から差し込んでいた。恐らく、ここが入口になっているのだろう。
「誰か、いないのか？」
大きな声で呼びかけるが、私の声が中途半端に響くだけで返事はなかった。……気は進まないが、いつまでもこの暗闇にはいたくない。私は意を決して地下に降りてみることにした。
後ろから殴られたのだろう、まだ頭がズキズキと痛む。薄暗い階段を下りていくと、やがて突き当たりにドアが見えた。光は、ここから差し込んでいる。そっとドアノブをひねってみたが、ここには鍵がかかっていた。開かない。ドアに耳をあてて向こう側の音を聞くと、とぎれとぎれに少年の声が聞こえた。
「……だ！」
「どうして……よ。ほ……」
どうやら会話をしているようだ。その相手の声は……アリソン・マクミランだ。私の時のように叫んでいるわけではない。むしろ甘ったるい猫なで声なのだが、孕んだ狂気は隠し切れていない。……まずい、彼が危ない。何とかして助けなければ。
「……わ。あいつを連れてくるから」
彼女がこちらに近づいているようだ。どうやら、私を連れてくるためのようだ。あの暗闇に逃げたところで、逃げ切れるはずもない。なら、いっそ不意打ちするしかない。幸い、このドアは向こう側に開くような作りになっている。タイミングさえ間違わなければ、私でも十分不意打ちは可能だろう。

足音が近づいてくる。カチリと鍵の外れる音がして、ノブが回る。……今だ！

ドアに体当たりするように、私は全力でぶつかっていった。アリソンは不意打ちをくらって私ごと床に倒れる。素早くあたりを見回すと、部屋の中央にある治療台の隅にあの少年が腰かけているのが見えた。だぶだぶのコートは脱いでいて、まるで寝巻きのようなこれまた大きめのシャツとジーンズといったラフな格好になっている。やはり、腕や足にも隙間なく包帯が巻かれている。怪我は……残念ながら包帯のせいで確認できないが、こちらをみて驚いた表情になったのを見ると、とりあえずは無事であるようだ。

「早く逃げなさい！　警察を！」

必死でアリソンをおさえつけながらそう叫ぶ。いくら私が男で相手が女であるといっても、運動に慣れていない私が狂ったように暴れる彼女を長く押さえておくことなどできない。

「早く……っ！」

左肩にやけつくような痛みが走る。思わず左手の力をゆるめると、アリソンはその隙を逃さず逆に私に馬乗りになって、私の首を両手で締め上げた。ああ、今度こそ、私は彼女に殺されるのだろうか。ここまでは、警官どころかケイシーも来そうにはない。そして、いつまでたっても少年が逃げようとする気配が感じられない。

「なんで逃げないんだっ！」

刺された肩は熱いのに、その周りは血で濡れて凍えそうだ。私が叫ぶのとほぼ同時に、部屋の奥で何かが割れる音がした。彼が、ランタンを落としたらしい。落ちたランタンから飛び散った

灯油が近くの木箱にかかり、火を移しはじめている。
「ああ、だめ。それは燃やしたらだめ。早く消さないと」
それを見たアリソンは慌てて立ち上がり、床にうち捨ててあったボロボロのトレンチコートで消火を始める。
「もういらない。みんな燃えちゃえ」
吐き捨てるような少年の声に、アリソンは凍りついた。
「どうして？　だってこれはあなたの」
「僕はジョンじゃない！」
アリソンが取り落としたトレンチコートにも火がまわり、周囲がさらに明るくなる。新しい炎に照らし出された彼の包帯は、赤と茶色と黒をぐちゃぐちゃにぶちまけたかのような吐き気のするようなおぞましい色に染まっていた。熱で空気がかき乱されてあの濃い死臭が一気に私のところにまで押し寄せ、私はむせながら入り口まで後ずさった。
「卵アレルギーでお菓子が食べられなかったのは僕じゃない。ラジオのチャンネルの取り合いで妹とつかみあいの喧嘩をしたのは僕じゃない。僕の葬式で目が真っ赤に腫れるまで泣いたのは僕じゃない！」
「きっと記憶が混じっちゃったのね。でも大丈夫。落ち着いたら、そんなのは気にならなくなるわ」
今までに見たこともないような形相で叫ぶ少年を、アリソンが必死でなだめる。それはまるで

癇癪をおこした子供をなだめる母親のようであったが、言っていることも、この部屋の状況も、そんな可愛らしいものではなかった。

「じゃあ、じゃあ、僕はこんな化け物だったっていうの！」

泣き喚きながら、少年は机の角に腕をこすりつけるように体当たりをした。机が動いて包帯がわずかに緩み、ボタボタと塊の混じったどす黒い液体が床に垂れた。そして、そこから先の腕が熟れすぎた果物のようにポトリと落ちたのを見た私は、悲鳴を上げてしまった。

はだけた包帯の隙間から覗くもとは白かったのだろう肌はおぞましい紫や黒に染め上げられ、落ちた衝撃でパンと弾けてグズグズの腐肉の山になった。少年の腕からは、ところどころ凝った塊の混じる血であったのだろう腐敗した液体が泡立つような不気味な感覚で零れ落ちる。それを見たアリソンは顔をこわばらせた。

「そんな、嘘よ……」

「僕は、こんな、ゾンビみたいな、子だったの？」

足を引きずって、彼は炎のそばでへたりこんだアリソンに近づく。恐らくその足も、腕と同じように腐って崩れかけているのをかろうじて包帯でおさえているのだろう。大げさにではなく、本当に今にも飛び出しそうな目から零れる涙だけは、まだ腐ってはいなかった。

「あの時みたいに、痛くはないよ。苦しくない。でも、なくなるんだ。どんどん、なくなる」

「嘘よ、嘘よ嘘よだってちゃんと書いてあったとおりにやったのよ、なんでなんでこんなひどい」

「あの日には、風邪、ひいてたのに、同じ日に、パパの、誕生日で、パーティして、どっちが、

正しいの。ねえ、あれは、誰なの」
「違うわ違うわこんなのジョンじゃない、ねえどうして帰ってきてくれないのよどうしてどうしてどうして」
彼らの嘆きは、しかしお互いに全く届いてはいなかった。あまりのことに凍りついた私の脳裏に、何故かナルキッソスの話が浮かび上がった。届けたい想いを、決して届くことのない鏡像にぶつけつづける、哀れなまでに純粋な茶番。
「死にたくないよ。死にたくない」
「そうよ、死なせたりはしないわ。また、最初から治していけばいいのよ。ダメなところは全部捨てて、お母さんがまた新しい体にしてあげるから。今度は、きっとうまくいくわ。ええ、きっと」
「でも」
救いを求めた先でも追い返され、もうどこにも救いはないと悟ったのだろうか。それとも、最初からそのつもりだったのだろうか。
「もう、いや」
ぐずりと崩れた足と引き寄せる重力に逆らわず、彼はそのまま倒れていった。燃え盛る炎の、その只中へ。
アリソンが叫んだ。彼女はためらうことなく火を移しはじめた彼の体を引き寄せようとした。しかし、支えの包帯が焼け落ちた彼の体は、引き寄せようと掴むはしからぐずぐずと崩れて汚泥

のように炎の底に沈んでいく。それでも諦めないアリソンの体にも、ついに火が燃え移る。その痛みと息子を助けられない嘆きに、最早人のものとは思えない声で吠えながら必死で手をかき動かすアリソン。私が凍りついたようにその地獄のような光景を眺めていると、炎と黒煙の向こう側に緑色の光が見えた。……彼だ。そこだけはまだ腐敗のまわっていなかった右目は、泣くことも笑うもなく、何の感情も見せずにただ静かに私を見ていた。そう、事務室で最初に会った時と同じように。

私ははっと我に返った。気がつけば地下室は火の海、黒煙で半ば視界は遮られている。逃げないと、私も危ない。ポケットにあったハンカチで口元を覆って、私は慌てて階段を昇っていく。下から迫る炎に照らし出されたそこも、やはり地下室だった。おそらく、私は殴られて気絶してから放置されていたのだろう。……よく凍死しなかったものだ。

手探りで、暗い階段を昇る。降りる時と違い、出口がかすかに明るいのが気を楽にしてくれる。あそこまで行けば、私は戻れるのだ。

転がるように玄関から外に出ると、何故か門の前に立っていたケイシーがぎょっとした顔で私を見た。

「た、助けてくれ！」

「え、え、え、えと、とりあえず警察、じゃない、病院に！」

ケイシーは慌てながらも、私に肩を貸して車の中に入れてくれた。

「一体何があったんです、というかどうしてそんな……」

慌てふためくケイシーの声が、私が普通の世界に戻ってこられたことを証明しているようだ。安堵で私の全身の力が抜けて、汚して悪いなと思いながら後部座席に倒れこんでふっと意識を失った。

昼にあんな失礼な態度をとったのが恥ずかしいくらいに、その後のケイシーは私のためにあれこれと手を回してくれた。

私を病院に運び込んでから大学の方に連絡し、遅れてやってきた警察にもいいように事情を説明してくれた。おかげで、学部長に嫌味を言われた以外に私に不利になるようなことは起こらなかった。

私が逃げ出した後、地下室からの出火が原因であの家はほぼ全焼したという。地下室からは女性の焼死体と、バラバラになった子供のものと思われる各部のパーツが見つかった。報道では伏せられていたが、それはあの子供達の遺体から欠けていたのと全く同じ部位であり、また焼け跡からその中の数人が持っていた物なども見つかったため、アリソンがあの事件の犯人であり、それに気づいてしまった私は口封じのために襲われた、そういうことになった。大学の方も、学部長の嫌味以外はおおむね私に有利なように処理してくれた。ケイシーが言うには、私の肩に刺さっていたナイフが儀式用のものであり、またあの家でネクロマンシーが行われた痕跡があることが他の教授の調べで判明したため、私は学術調査中に不幸な事件に巻き込まれたものとしたらしい。魔術が絡む事件に首を突っ込むことが学術調査で片付けられるこの大学の体質に、今だけは

感謝したい気分だ。
被疑者死亡で終わったこの事件は、他の様々なニュースに埋もれて、やがて世間からは忘れられていった。
「ですが、私は終わらせたくないんです。真実を明るみに出すのが我々マスコミの役割ですから！」
……訂正、ケイシーだけは忘れようともせず真相解明に励んでいる。それで療養中の私のところに来るのは正直鬱陶しいが、あの時の借りもあって邪険にするのははばかられる。
大学としてはあまりこういった事件の真相をさらけ出してほしくないし、それ以前にあの哀しい親子のことを軽々しく話してやるつもりはない。私には子を失った母の嘆きも、生きながらだんだん体が腐り崩れて自分が誰なのかも分からなくなる恐怖も想像がつかないし、彼らも恐らく他者の理解や同情など最初から求めていなかった。
「……あなたは、どうして人の口が容易く嘘をつけるようにできているか分かりますか？」
「……？　いいえ」
「真実が人を傷つけ、時には殺す刃であることを、人が無意識に知っているからです」
アリソンが死者の蘇生に踏み切ったことを、彼らは知られたくないのだろう。そうでなければ彼女があんな隠し部屋のようなところで儀式をすることも、彼も腐った体を幾重にも覆い隠し人目をさけるように夜にしか出歩かないこともなかったはずだ。……そう、あの日の事務室で彼が包帯を取って真実を話せば、あるいはこんな結末にはならなかったのかもしれない。

「つまり、この真実は誰かを傷つけると？」
「納得がいかないのなら、こう言っても構いませんよ。……上から緘口令をしかれています」
ケイシーは不機嫌な顔で黙り込んだ。無理もない。だが私だって、この結末に納得できているわけではないのだ。もしあの時、私があの臭いの正体に気づいていれば。もしあの時、私が彼女に会わなければ。「もし」の仮定はどこまでも続けられる。そして、どこまでも仮定でしかない。
彼らも、家も、もう燃えて跡形もない。そして、彼は最後まで私以外の前に姿を現すこともなく、そして名乗らなかった。もう、彼が誰であったかを証明するものはない。本当に、誰でもないものとして終わってしまった。あの申請書も、もうどこにもない。そう、私がこのまま墓場まで事件の記憶を持っていってしまえば、誰も触れることはできない。悲しいことだが、あの真相を口にするよりは忘れられた方が彼のためなのかもしれない。
ふっと見た窓の向こうでは、街が何事もなかったかのようにクリスマスの装いを始めていた。

大谷　凜（おおたに・りん）／法文学部人間科学科四年次

佳作

愛がこわい

菅谷　聡

俺はイライラしている。憤慨している。自分の置かれている状況に、待たされていることに、空腹に市に国に、イライラしていることに。俺の憤慨の結果として足元にはうるまの吸い殻が山となっている。せっかちに消した数本はヤクルトの野球帽をかぶり緑色のジャージを穿いた浮浪者が拾っていった。炎天下が体中から水分とミネラルを奪う。滴る汗に、帽子をかぶって来なかった自分の不明にも腹が立ってきた。たいした荷物の入っていない鞄も余計に重く感じる。黒い鞄は空でも重そうな気がする。

俺の横に立っている、というか乳母車にもたれ掛かっている老婆が信号も横断歩道もない道路を突然渡り始める。ご乱心か。突然の出来事に白い軽ワゴンの運転手は驚いて、ジャマイカ人も驚愕のレゲエを垂れ流しているのもお構いなしに、急ブレーキを踏んでレゲエをバックに老婆を罵った。およそうちなーぐちと呼ばれるものの汚さの粋を集めたような台詞を矢継早に叫び白い

軽ワゴンは走り去った。老婆は渋滞の火種を作って渡り切った。
「越来は死にました。全ては米軍が悪い」と眼の前の電柱に真っ赤な文字で殴り書かれている。書かれているのだから仕方がない。越来さんもお気の毒に。心中でもしたのだろうか、と一瞬頭に浮かんだがすぐ消えた。どうでもよかった、落書きだし。
俺が落書きを見ながら呆けていたからだろうか前歯のない浮浪者が歩み寄って来た。
「もっているだけでいいからお金くれないかい」
目尻を情けなくハの字にして情けない声で言われたが、あり合わせしかないから断った。
「そんな金ないっすよ」
二本の犬歯の間から口内を洗浄することを放棄した臭いが流れ出てくる。
「三百円、いや五百円でいいからくれないかい」
何故値上げ。一瞬で欲しいものが増えたのだろうか。
「俺も金ないんすって。貰いたいならお金もってそうな人に言って下さいな」
前歯のない浮浪者は背中をより一層丸めて去って行った。土地成金にでも会えれば良いが。
入れ違いで俺を待たせていた奴が来た。オシャレな若者風の恰好をした女が来た。なんて言うん、花柄のチュニックに濃い紺のパンツ？髪型は肩にかかるロングカール？足元は蜜柑色のヒール？雑誌の受け売りみたいな恰好である。同じジーパン穿いているのだけれどもなんて言うのか色見が違う。着こなし方が異なる。俺より二歳年上のアシスタントのマキである。色眼鏡なんぞ掛けおって、芸人か。

「お前さんが遅れてきたせいで浮浪者に二度もたかられたぞ」
「浮浪者みたいな恰好してるからでしょ」
俺とマキは無言で嘉間良の坂を下る。太陽とジェット機だけがさっきから相も変わらず煩い。

俺は一応漫画を描いている。何処に需要があるのか皆目見当つかないエロ劇画を描いて糊口を繋いでいる。例えばこのまま何十年もエロ劇画を描いてその筋の大家になろうなどという野心はなく、あったとしてもやっぱりスタイリッシュなエロ漫画描きたいじゃんね。

だからこうして今日もアシスタントのマキとともに琉映へと足を運んだ。「三十本に一本ぐらいは高名な映画監督が偽名で撮ってるらしい若松孝二とか原一男とか、行ってみろよ豊久」という一報を自称メディアクリエーターから受け取ったので行ってみることにしたのである。高名な作家の作品を観たからといって血肉になるとは限らないんだけれども。僅かな希望に胸ふくらませ大人入場券を二枚買った。成人映画なのだから小人がある訳ないのだが「大人」と書かれていた。学割やシルバーパス、レディースデイといったものも皆無であり俺の後ろに並んでいる残波のワンカップをもったシルバーも正規料金であった。俺は百円で売られているなんとかコークなるかったるい甘さだけが取り柄の炭酸飲料を購入し燈色のホールへと入った。マキはオリジナルさんぴん茶というオリジナリティーの欠片もないペットボトルをもっていた。席に着くなり俺は失望した。所々染みの目立つスクリーンには「実録ＪＫ！夜這い先生」が上映されていた。
「新作じゃん」マキが呟いた。

「っていうかロマンポルノにしちゃあお粗末なタイトルだよな」
「いやタイトルはこんなもんでしょ」
「あっ、援助交際の子たちを説教していく筋なんだ」
「お金払ってんじゃん」
「馬鹿だよな、全く」
「あはは、女の子泣いてる」
「一応脚本としてはまずまずかな」
俺とマキは概ね満足して琉映を後にした。
俺はここで自分が今日一日さっきのなんとかコークと起きぬけのインスタントコーヒーしか口にしていないことを思い出した。俺はなにか閃いた発明家のようにハッと口を開き、マキを見つめた。察したように先方が口火を切った。
「お腹空いたね」
「うん」
「これからどっか行く？車は胡屋だけど」
「ここら辺でなんかないかの」
「じゃマック行く？」
「なんであんなたわけた飯屋に行かなきゃならんだ。店ならもっとあるだろ」
「あんたいっつもそうよね。なんか恨みでもあんの？エンダーなら行くくせして」

「安けりゃいいってもんじゃねぇし、兎に角俺はマックアレルギーなの」
「随分後天的ね」
「生まれつきだきっと。いやたぶん、うん」

俺とマキは再び嘉間良の坂を上り知り合いが営む飯屋に行った。この間行った時はお好み焼屋だった。俺とマキはＰＡＳＴＡと書かれた暖簾をくぐった。席に着くなりその知り合いの某にぬるい水を持ってきていただき、ラミネートされているのによれよれになったメニューを渡していただいた。閑散とした店内に生い茂っている観葉植物が「おススメ」と桃色の白墨で書いてある小さな黒板を埋めている。「おススメ」という字の下にチラシの裏でも使ったような紙が貼ってある。オキナワ風魚介パスタ７５０円、と汚らしく書いてある。俺はオキナワ風を注文した、飲み物の次に安かったので。マキはなんちゃらミートソースというのを注文していた。

俺らは品を待つ間、今度のネームがどうとかゲラはこうとかさっきの映画はやっぱり駄作じゃないかなどと軽く話していたら終いには口論になっていた。口論になり始めた矢先、奇天烈なものが珍妙な臭いを漂わせながら薄汚い盆に乗ってやってきた。

なんぞや、俺とマキ一時休戦。

見るからにふやけた麺に浮く油、切り身の魚はどれも色合い悪くパセリまで萎びている。パセリはどの道喰わんが。

「ははは、マキさんこれが今風、オキナワ風なんだよ」などと嘯きながら口に運んだら一考、「戦

争の日」の給食で喰ったすいとんが食べたくなった。俺は大人しい口調で自称シェフの某を呼んだ。なんちゃらミートソース片手に腑抜けた面の某は足取り軽くやって来た。「てめぇ恥ずかしくねぇのか」などとは言わず「これどういうレシピ？」とやんわり尋ねてみた。

「ああこれはどれこれであれそれ」と聴く耳持ち合わせない俺は具体的なことをきちんと聞き流したがどれも県産品で無いことは十分に理解できた。というかこの白身魚ナイルパーチやん。なにか可笑しいのかは知らんが、それともニヤつくことが接客の妙なのかも知れんが某は「いや～豊久君、今度オキナワ風グラタンを作ってみようと思って」と待ち受ける明るい未来を夢想していて御満悦だった。

「あのさ、さっきから気になってんけどオキナワ風ってなんなん？」

「そりゃ豊ちゃん、今流行りのあれだろ。オキナワ風だろ」

沖縄の中でオキナワ風が流行ってるのかどうかはやはり俺は知らんが、少なくともこのたわけた料理がオキナワ風でないことは確信している。そらマックが増えるわ。

「あのよ、おたく料理屋辞めたら？」

マキはヤクザ映画の成り上がりの若頭のような口調で言った。御満悦の面は一瞬で凍りつき、まるで液体窒素を掛けられたかのようだった。その後はまるで警察の尋問のようだった。巡査長石川マキの事件簿。俺は尋問されたことしかないが。

それは俺がある大学に在校中、米国軍のフェンスで洗濯物を干す、というパフォーマンスアートを制作していたところ警察官かＭＰか知らんけど三名のそれらしき男が走ってきたので彼らと

同じ方向に走ってみた。しかし芸大生というのは概して体力乏しく足遅く、呆気なく捕まった。たぶん全国的に遅いのではなかろうか、正月の大学対抗たすきリレーに芸大が出ているところを見たことがない。闘争心がないのだろうか、いやある奴でも官吏相手では呆気ない。

そんなことを思っている内に某は途方に暮れて、幸い煩い太陽も暮れていたので俺とマキは無言で店を出た。

俺は音楽の街という全ての街に該当しそうな屋号をもった施設の立体駐車場に停めてあるマキの黄緑色の軽ワゴンに乗り込んだ。カーステレオからは弾き語りって言うの、ギター一丁に囁くような唄声が流れバックミラーから垂れ下がる巨大な熊のマスコットは小刻みに揺れていた。

「陽、沈んだな」

「もう七時だもん」

「ネーム描き終わる頃には明日だな」

「だってあんたがちゃんと考えてこないからじゃない」

「だって俺、そんな漫画とか得意じゃないし」

「ほら、また始まった」

大きな十字路を左折して小さな筋道へ入って赤線街を通り抜けたらそこにはアトリエ、と言えば洒落ているが要は自宅兼作業場、ボロ赤瓦築三十八年月三万円、復帰っ子の物件。作業場、業を作る場なんて因果なものである、全く。ヘッドライトが駐車スペースを照らしたら不純性交を行っていた盛り猫が眼を丸くして光らせて逃げて行った。軒下でやれ。

「猫に愛ってあるのかね」
「何？猫を擬人化した漫画にするの？いいんじゃないの最近そういうの流行ってるんでしょ、猫耳とかさ」
マキは車から身を乗り出し、さっきまで猫たちがいたところに車輪を合わせながら言った。
「けど劇画にしたら気持ち悪いだろ」
「それもそうよね。やっぱりさっきの若妻ものにする？三回連続だけど」
車は一度前進し、軌道を変えて駐車スペースに収まった。
「若奥様は猫を飼う、ってのはどう？」
「タイトルはそれでいいかもな」
若奥様が猫になる、俺は心の中でそう呟いた。
俺とマキは車から降りて家の中に入った。主人の帰宅に出向くのはいつもゴキブリたちだった。
それと時々ヤモリ。
「バルサンだな」

「ウォッカにする？」
作業場に来てすぐに酒を飲もうとはこのアシスタントやる気あんのか、と思ったが俺はウォッカをホットミルクで割ってもらうことにした。暗い居間の中心、作業机の真ん前で俺は牛乳が温まるのをあぐらを掻きながら待っていた。

マキは元ポールダンサーだった。あまり人気のないダンサーだった。マキはきれいに磨かれたステンレスの棒をスルスルと登り、ヒュルヒュルと股を開きながら滑り降りていた。動きはぎこちなかった。兵士たちや俺の劣情を駆るべく尻を突き上げて腰を振っていたがキレがなかった。誰もチップを弾まなかった、挿まなかった。マキはブラジャー、というか隠すべきところが透けていてどうでもいいところが羽やらスパンコールで施されている胸当てを拾って寂しそうに鏡の向うへと去って行った。その後演目の合間に小便をしに行ったら隣で用を足している酔っ払った中南米人っぽい人に「ここは白人ばっかりだ。ブラックやジューリッシュやイエローはいつだって肩身が狭い。糞喰らえ、この淫売」というような感じのことを熱弁された。俺は返答に困って「あー、うー、差別はよろしくない、うん。君プエルトリコ人？」などと曖昧に頷いていたら、もの凄い勢いでまくし立てられた。俺はスラングがよくわからなかったが、とりあえずマザーファッカーというのは聞きとれた。物騒な言葉である。後ろに並んでいる白人たちは腹を抱えて笑っていた。

マキときちんと会ったのはこの後日のことで、マキは客入りのよろしくないジャズ喫茶で給仕をしていた。数少ない客は俺でありつまり常連ということなのだが、はて？こんな給仕さんいたっけなと頭を傾げていたら店内に俺とマキと店主のオバサンしかいないから当然の流れで話すことになり「へぇ漫画描いていらしてるんですか」「ああ君は最近ここで働きだしたの？」「いやー私岡崎京子とか好きなんですよ」「ああ僕もだいたい読んだよ。ヘルタースケルターとかいいよね」と中々弾んだ。昼は給仕、夜は踊り子、なんと健気な子なのだろうか、と連絡先を交換し

たのが百年目。
「あんたよくこれで芸大受かったわね」
暗い居間で白紙に猫を飼う若奥様を描いていた俺にウォッカミルクを持ったマキがやって来た。
「織りと染めに関してはもうちょっとマシだ。工芸科に入るのにデッサンばっかしててもあれだろ」
「けど男が織染ってのもね」
「なんだいその差別発言、いっつもいっつも。お前さんガンジーが糸紡いでる写真とか映像見たことないのかい」
「いや社会の資料集かなんかで見たけどさ。あんたにそんなたいした目的とかないでしょ」
俺は目に見える搾取をされていた訳でもないしなにかから独立しようと試みた訳でもない、織りと染めを学ぼうという目的こそあれどそれ以上の目的も目標もなかった。ニート予備軍ですね。
「うむ。目的ないから今若奥様描いてんだよ」
「豊久、本当にこのままでいいの？」
毎度毎度同じことを言う、親か。俺だって良いはず無いことぐらい分かってらぁ。もしくは分かったふりしてらぁ。だけどそれ以上なにも出来やしませんよ、俺は。ええ屑ですよ。
「土方でもやるよ、そのうち。そしたら」
言葉が詰まる。そしたら、良い作品でも出来る、とでも言いたいのだろうか。格好でもつけてこの場を収めようというのか。

「とりあえずこの手も少しはごっつくなるな」
「女みたいな手よね。指も細長いし」
「周りの女の手の方がよっぽどごつかったよ」
マキの指先からは薄めの赤で染められた丸っこい爪が伸びていた。
「デッサン力ないって言うけど、俺の彫った型紙見たことあるだろ」
「だけどあれ、下手じゃん」
ピノキオだったら鼻が引っ込むほどの事実である。俺はウォッカミルクを口に含んでわざとらしく黙るしかなかった。
「じゃ、私バイト行ってくるから」と言って着替えの入った鞄をもって玄関に向かった。ポールダンサーはもう辞めてしまっていた。
良い判断だと思う、だって下手すぎだもん。

一人でせこせこと下書きをしていたら二十三時を過ぎていたのでラジオを点けた。妙に落ち着いた声で「みなさま今晩は。今宵もやって参りました深夜寄席。今回は少し趣を変えまして、前座特集と題してまだ弟子入りして日も浅いホープたちのお噺を聴いていただきま」と途中で音声が悪くなった。直りかけたラジオから下手糞な前座の口上と枕が流れてきた。喋り出しにまず噛む、人物の出番をとちる、あらゆるオチを外す。下手すぎて怒りと恥ずかしさが込み上げてきた。なにが悲しくて俺はこの噺を聞いているのだろうか。

いまはあついおちゃがこあい出囃子が奏でられ、囃子が一番上手だと感じた。代わりに俺が出て喋ろうかと思ったほどだった。もう漫画描くの辞めて落語家になろうかな。落語家になったとてこれ以上俺は貧しくはならんだろう。落語に対して失礼だろうか。俺はさっきまで良いペースで進んでいた作業を急に辞めたくなった。そう思ってしまえば手は動かなくなるもので、フリーズした俺は机についた傷を眼で数えることしか出来なくなっていた。そのうち数の方が足りなくなるのではないだろうか。俺の漫画かて下手の内だということは重々承知している。これまでも、今も、これからも濃厚にそうである可能性が高い。陽が沈み溜め込んでいた熱気を全て放ってしまい、今となっては冷気を流し込んで来るこのボロ屋から一生出られずに生きて行くことになるかもしれない。このまま俺も白蟻とゴキブリとヤモリたちの餌となって朽ちて行くかもしれない。まぁ、それでもいいんだけどさ。

今年一番の冷気が舞い込んできた。合わせるように風が強まった。隣家のフクギの葉が擦れ合い、啜り泣き始めた。俺は小蝿舞う台所へ行き、ミルクなしのウォッカを飲み始めた。

四杯も飲めば意識と無意識の線引きが怪しくなり、床に就けば安眠を得られそうな気さえする。けれど俺は眠れぬ。まだネームを描き終わっていないから不安なのだろうか。それとも別の不安だろうか。朝日が昇れば少しは寝付けるのだろうが、今の天気の様子だと朝日は拝めそうもない。俺は半端に酔った体を立ち上げ、外へ出た。

道路には干物みたいにペターっとなった元猫が打ち捨てられていた。蝿すら湧かない。何台もの車に轢かれたのだろう、もはや灰色の絨毯である。むごい、ゴキブリすら殺せん俺には見るに

堪えない。近所に「猫を殺すのは犯罪です」と主張している看板がある。どっかのじいさんが猫に毒まんじゅう与えるもんだから猫好きが怒ったらしい。それでもやっぱりひき逃げには敵わんな。まぁ投身自殺かもしれんが。

二、三分も歩けば閑静な住宅街、と言えば手前味噌だがとりあえず歓声が歓楽に変わる。歓楽と言っても大いなる賑わいを見せている訳じゃあない。寂れ気味。

そんな吉原を月すら傾く頃に一人散歩する。原色の煌くばかりの看板の下、桃色の蛍光灯に当てられた色とりどりの女たちが、時折俺に優しい声をかける。果たしてこの声が如何なる算段より発せられたものであるのか俺はもとより、女たちにも実のところ明瞭ではないだろう。俺は不意に立ち止まると明かりをほとんど発さぬ筋道へと歩を進めた。途中、鉄格子のかかった窓より、男の物とも女の物ともつかぬ恍惚の声が聞こえたこと以外、人の気配はおろか猫の佇む気配すら感じられぬほど、仄暗い静寂な道であった。

道の果て、漆黒に白で「ミューズ」と書かれた看板の掛る建物の前で俺は歩を止めた。「ミューズ」という名とは裏腹の半ば風化したコンクリートの平屋宿である。あるいは崩壊寸前の不安定な意匠こそが現代のミューズを冠するに相応しいということなのだろうか。

ミューズの中から明かりは漏れていなかった。

俺は以前、ここで同級生が座っているのを見かけた。確か内地の専門学校に行ったはずであった。なにが彼女の身に起きたのかはわからないが、俺はこの「ミューズ」に妙な親近感と嫌悪感を抱いた。ここ数カ月、明かりが灯ることはない、廃業したのだろうか。この街も外のそれと同

じく移り変わりは激しい。
鼠が足元を駆け抜けた、俺も帰ろうと思った。寒い。

家に帰ると俺は再びゴキブリたちに迎えられた。
豊久の野郎もう帰って来やがったこんちくしょうめ、とゴキブリも思っているかもしれない。いいんだよ、ここはみんなの家だよ。愛を育もう。平和主義者のゴキブリがなだめる。いや断固として奴を追い出すべきだ。いつ我々に手を出すかわからない。今こそゴキブリの力を見せつけるべきだ。べき論者のラディカルゴキブリが絶叫する。宿替えしてもらうのはどうです？敷金等をこちらで出すのは無理ですが。油で頭を照からせながらゴキブリの官僚が言う。
ああおもしろい虫の声。しかしゴキブリとて泰平ではない。
我輩はヤモリである。名前なんぞ無くてもよい。あったかて腹の足しになる訳でもあるまい、無闇に考えを増やしては余計に腹が減るだけである。丸々と太った天井裏の片眼の大将の処にでも行って蛾やら御器嚙でも分けてもらおうか。我輩はヤモリであるし人見に秀でた訳でもないがここの家主は全くの変わり者、ってか偏屈この上ないクズ野郎でその内赤貧に喘いで我輩や或いは我輩の餌までも唐揚か何かにして喰うのではなかろうか。何より片割れの女が不憫でならん。ああくわばらくわばら。
虫だって爬虫類だって色々考えながら生きてんだろう、時には悩み解決すれば喜び、死ぬのも恐いだろう。なんとまぁ都合の良い妄想だろうか創造の足しにもならないよな。

俺、ハァー、と溜め息一つ。
夜の終わりを告げる仄かな明るみ、惣菜屋の仕込みの音と臭い、底冷えのすきま風が部屋を覆い始めた。俺はいよいよ不安より眠気が増してきた。睡眠不足は体に悪い。俺は朦朧とする中、遊戯場の広告の裏に訥々と文字を書き始めた。決意表明？出来の悪い詩？
それとも遺書？まぁ酔っ払いのたわ言である。

なにかを失うことを恐れていない。お金を失うことだって、漫画が描けなくなることだって。オオカミだってこわくない。
饅頭も、熱いお茶だってこわくない。
あるいはマキがいなくなることも。
今はただ、愛がこわい。

開け放たれた窓から太陽の光と少し涼しくなった風が流れ込んできた。ブルっと一度身ぶるいをして私は起き上った。同じベットに寝ているのに私と琢磨の間には妙な距離があった。寝返りを打って出来たというにはあまりにも不自然な、溝だった。枕元の携帯電話を取って見るともう十二時だった。私は格別に急かされる訳ではないけれどベットの下に折り畳まれている下着やジーパンをそそくさと穿き始めた。琢磨に起きる気配はない。洗面所に行くとそこにはむくんだ顔

の私がいた。
「飲み過ぎたのよね」呟いて笑う鏡の中の私も眼だけは笑っていない。吐き捨てた唾が蛇口から垂れ下がっている。肩をすぼめて排水溝を眺めてみる。どこまでも続く小さな洞窟のように見えるけど、いつかは海に辿り着くのだろうか。その前に地獄に着いてしまうのだろうか。私はもう一度鏡の中を覗いてみた。笑えない眼の下には黒い楕円が模られていた。
「マキ起きてたのかい」
鏡の中に琢磨が割り込んできた。
「あなた、下着ぐらい穿きなさいよ」
琢磨の体はところどころ緩んではいたが私より三歳分の若さがそれを誤魔化していた。私に比べて艶も張りもある肌が憎たらしい。
「ああごめん。そういやマキ、今日なんか用事あるんだっけ」
「企画会議」
私は自嘲気味に笑ってみた。やっぱり眼は黙っているのだけど。
「ああ琉映行くんだっけ、豊久によろしくね」
「よろしくもなにも、あなたが行けって言ったんでしょ」
琢磨ははにかんで、ベッドへパンツを取りに戻った。
豊久に「遅れるよ」とメールを一通送ってみたが「エラー」という返事しか来なかった。なんだ、また携帯停められたのかよ。

クスノキの切り株並木を横切って、スクランブル交差点の十字路に出た。高校の青っぽいジャージを着た三人の女の子が二段のアイスクリームをもって渡っている。信号が青になる。
私もアイスを食べようかな、駐車場二時間無料になるし。
むき出しのコンクリートが窮屈そうに立体駐車場を支えている。
伽藍とした灰色の広間に私の黄緑色の車が一台。
流行ってないな、休日なのに。
私はソルティーバニラとチョコミントのダブルをカップに入れてもらった。私の周りはみんなコーンに入れる。
「同じ値段なんだから容器も食えた方がいいだろう、第一俺はアイスは好かん次はぜんざいにしよう」と言い放つ意地汚い男もいた。バニラとミントが溶け合って輪郭がぼやけている。私はその曖昧な境目をすくって食べる。甘さがスーッと鼻の奥を抜ける。
３３０沿いの古びた画材屋の前に眼つきの悪い男が立っている。片足をせわしなく揺らしながら、時々上を向いている。そしてうつむいたかと思えばなにかを呟いている。その悪い眼が私を捉えるなり一瞬睨みつけすぐににやけた、気持ち悪い。
「お前さんが遅れてきたせいで浮浪者に二度もたかられたぞ」
「浮浪者みたいな恰好してるからでしょ」
遅れたことは申し訳ないけどたかられたのは私のせいではない、服装というか醸し出す雰囲気が似ているのだ、類を呼んでいるのだ。

「もう上映してたらどうするんだよ」
「美里ホテルで休憩でもする？」
豊久は黙り込んだ。
そのまま私たちはいつもより長く感じる坂を下った。

「実録ＪＫ！夜這い先生」本日の上映14時台はそんなタイトルの映画らしい。ポスターが貼られているけれどとても二十一世紀のデザインには見えない、懐古的な昭和デザインを狙っている訳でもないようだ。いつの映画なのだろう。受付にはロマンスグレーのおじいちゃんが銀縁の眼鏡を掛けながらタイムスを読んでいる。カウンターには小さな黒板に可愛らしい字で本日の上映プログラムが書かれている。おじいちゃんの字だろうか。12時台には「囚人女サソリ５０８」というのが上映されていたようだ。琢磨が話していた映画はこちらかもしれない。小さな黒板の横にはポテトチップスやハーシーのチョコレートが籐の籠に入っている。映画館価格ではなしに通常価格で売られている。さっき食べたアイスの甘さが仄かに残っているので私はお茶を買って、山吹色のホールへと入った。映写機の音がホールに響く、ジーっというノイズの混ざった音とともにスクリーンに光りが放たれた。
「実録ＪＫ！夜這い先生」明朝体のタイトルが浮かんだ。ミニスカートにルーズソックス、肩にかかりそうな茶色い髪の毛は相当傷んでいる。この女優が実際に高校生だった頃を再現しているのだろうか。携帯電話だけが最新型だった。スライド式タッチパネル。

「新作ね」
「んっ、そうか？」
「携帯、それと走ってる車」
スクリーンの中には郊外都市の繁華街が映し出されていた。
「っていうかロマンポルノにしちゃあお粗末なタイトルだよな」
「いやタイトルはこんなもんでしょ。わかりやすいパロディ」
前の席で手拭いでねじり鉢巻きをしているおじいさんが大きな寝息を立てている。
「あっ、援助交際の子たちを説教していく筋なんだ。これホテルかなスタジオかな」
「お金払ってんじゃん」
「馬鹿だよな、全く」
「あはは、女の子泣いてる」
映画も中盤を過ぎたあたり、素顔の隙もない化粧をしたおばさんがヒールを鳴らしながらホールに入って来た。
「一応脚本としてはまずまずかな」
「あの女優誰かに似てるのよね」
七十分は途中まで良いペースで過ぎたが、終盤冗長になった。
外に出るなり豊久は私を見つめてきた、玩具を欲しがる子供のように。私はこの男の保護者ではないし飼育係でもない。せいぜいお手伝いさんのような感じだ、仕事の上での。

「腹減ったね」
「うん」
「マック行く？」
「なんであんなたわけた飯屋に行かなきゃならんだ。店ならもっとあるだろ」
子供ならあやせば良いが、この歪みきった成人はどのように対処すればよいのだろうか。
「あんたいっつもそうよね。なんか恨みでもあんの。エンダーなら行くくせして」
「安けりゃいいってもんじゃねぇし、兎に角俺はマックアレルギーなの」
一度医者の所に連れて行こうかな、嫌がるだろうけど。あるいは保険に入って無いだろうけど。
「随分後天的ね」
「生まれつきだきっと。いやたぶん、うん」
不貞腐れた子供のように、自信なさげに伏目がちに言葉をつなげた。
私たちは営業しているのか定かでない店の並ぶ坂道を再び上った。

「けどあの女優の演技酷かったわよね」
「えっ、あの棒読みお遊戯会的演技なのがいいんだろ。ベタさ二割増になるし。田中絹代みたいだったらおじさんたちも困っちゃうだろ、名作見に来てる訳じゃないんだから」
豊久はおじさん側の視点だった。そして早口だった。何か隠していることでもあるのだろうか。
私たちはカフェのようなお店の窓側に座っていた。店のカウンターには私の知る限りでもウルト

ラ兄弟、仮面ライダー、あとあれだ、キカイダー、そしてエヴァシリーズのフィギアが整然と並んでいた。対照的に手入れのされていない観葉植物が店内を暴れまわっている。この店、絶対美味しくないよね、だからマックにしようって言ったのに、私は頭の中で愚痴をこぼす。豊久は無駄に熱さを帯びたロマンポルノ論を延々と語っている。私はほとんど流しているから独り言なのかもしれない。

ミートソースにしよう、どうせレトルトなら一番外れの可能性が低そうだ。もしきちんとデミグラスソースから作っていたら会計の時に敬意も一緒に払おう。

「とりあえず増村保造は偉大だ」

「あっそ」

私は誰でもそう言われれば怒る返答をしたため、豊久も例外なく怒ってしまった。

「お前その言い方は」

何かが豊久の言葉を遮り、後ろに振り返させた。何か、とはなんてことはないさっきこいつが注文した料理だった。豊久は目を丸くして皿の中を凝視している。ははは、言わんこっちゃない豊久君、だからマックにいやせめてミートソースとかナポリタンにしとくべきだったのだよ、私は胸の中で呟いてみた。

店員が私のミートソースをもってきたついでに豊久はその店員と談笑し始めた。お互い笑っているようで眼が笑っていない。私は粉チーズをかけながら二人のやりとりをぼんやり見ていた。フォークでお皿の中に渦を作り、その中心を口に運ぶ。プニャっというまるでふやけたうどんを

食べたような感触が顎に伝わる、そして「食べる」という行為を冒涜するような腐乱した香りが口の中に広がる。
これは誰かが言わなければいけない、言わなければ私も背徳者に加わってしまう。
「あのさ、おたく料理屋辞めたら？失礼でしょ、こんな料理出して。恥ずかしくないの？あなたにとって料理っていったい何？どこをどう考えればこんな物が作れるの」
談笑するふりをする二人の顔から偽りの笑みが消えた。
店員は言葉に詰まっていた、誰からも感想を言われたことがないのだろうか、それは彼にとって最大の不幸ではないのだろうか。
「あっ、あ〜、す、すみません」
店員は眼を居所なく動かしながら絞り出すように言った。
豊久は黙って窓の外の街路樹を眺めている。
しばらく無言の時間が続いた。
風がカタカタと、カウンターの向うの網戸を揺らす音だけが響く。そしてカウンターの上の惣流アスカとウルトラの母を倒した。
「あっ、そろそろ行く？」
豊久は何事もなかったように言い放った。
薄雲を纏った夕陽が寒々としたコンクリートの海を包み込む。

私は以前黒人の客に貰ったＣＤを車の中でかけていた。ギターを弾きながら囁く、淡々としたアルバムだった。

「陽、沈んだな」

「もう七時だもん」

「ネーム描き終わる頃には明日だな」

「だってあんたがちゃんと考えてこないからじゃない」

「だって俺、そんな漫画とか得意じゃないし」

「ほら、また始まった」

豊久は親指の爪を噛んだと思ったら次の瞬間には頭を掻きむしっていた。いくら掻きむしったっていいアイデアなんて出てきた試しがない。七時を過ぎ、休日ということもあって３３０は芋虫の行進のようにゆっくりとしか進まなかった。頭と尾からオレンジの光を発する大小色とりどりの芋虫は将来どんな形の羽をもつのだろうか。芋虫を嘲笑うかのように空いている対向車線を何台ものバイクが駆け抜ける。マフラーが叫ぶ。豊久が頭から手を離した。

「なんだっけあれ、ダサイ族だっけ？暴走族に比べてあまりに斬新だよな。俺は役所の意図を知りたい」

「そうよね。あれ、すごいわよね」

私は笑いが止まらなかった。あまりにも的確なつぼだった。ダサイ族はクラクションで調子外れのゴッドファーザーのテーマを奏でながら、何処かへ走り去って行った。ダサイ村だろうか？

私たちは裏道を抜けてようやく作業場に辿り着いた。
駐車場で猫たちが愛を育んでいる、あまりにも無邪気に。
愛？果たしてそんなに都合の良いものだろうか。
「猫に愛ってあるのかね」
豊久が私を見透かしたように呟いた。
「さあね、猫に聞いてみたら？私にはわからない」
人にすらあるかどうか定かでないものを猫にまで求めては酷だと思う。なにより無い方が猫にとっては幸せなのかもしれないし。
「それとも何？猫を擬人化した漫画にするの？いいんじゃないの最近そういうの流行ってるんでしょ猫耳とかさ」
「けど劇画にしたら気持ち悪いだろ」
「それもそうよね。やっぱりさっきの若妻ものにする？三回連続だけど」
私は一度車を前進させ、軌道を変えて駐車スペースに収めた。
「若奥様は猫を飼う、ってのはどう？」
「タイトルはそれでいいかもな」
私は古民家特有の立てつけの悪い戸をガタガタと何度も揺らしながら、やっとの思いで開けた。
黒い影が瞬時に何処かへ走り去った。
「バルサンよね」

豊久はエロ漫画しか描けない訳ではない。私がジャズ喫茶でウェイターをしていた頃、二三度豊久の作品を見せてもらったことがある。話を聞いた限りではてっきりアングラ寄りの薄暗い作品でも描いているとばかり思っていた。「人間というものを凝視せずして、どうして芸術が生まれようか」一丁前にそんなことを言う奴にしてはあまりにも静寂な、欲も汚さも包み込むような作品だった。私はあまりにも素直に心を打たれてしまった。こんなものを作る人間の傍に居てみたい、そう思ってしまった。私はなんと浅はかでなんと欲深いのだろうか、と最初は思いもしたが別に後悔はしていない。

「酒はまだかい」

「もうちょっと待ちなさいってば」

仕事場に来て早速一杯、酔っていた方が自由に描ける、という。そんなのはすぐに破綻するだろうけど、豊久がそれで良いのなら酒ぐらい注ぐ、牛乳ぐらい温める、骨ぐらいは拾ってあげる。

「随分涼しくなったよな」

「そうね、そろそろ厚着しなきゃね」

豊久はジーパンに薄手の長袖シャツを着ているだけだった。

牛乳に膜が張り始めた。豊久は台所の明かりを頼りに描いている。

沸騰した。私はお玉で牛乳を注ぐ、ウォッカの入ったグラスが曇る。

「出来たよ」

「あっ、うん。ありがと」
「どんなの描いてるの？」
「猫」
確かに猫だった。しかしバランスの悪い、間の抜けた猫だった。
豊久はいつも手を抜く、いや抜きすぎる。
「あんたよくこれで芸大受かったわね」
「織りと染めに関してはもうちょっとマシだ。工芸科に入るのにデッサンばっかしててもあれだろ」
豊久は織染に対して未練がましい。これは漫画なのだから求められるのは文様や色調ではない。
「けど男が織染ってのもね」
「なんだいその差別発言、いっつもいっつも。お前さんガンジーが糸を紡いでる写真とか映像を見たことがないのかい」
「いや、社会の資料集かなんかで見たけどさ。あんたにそんなたいした目的とかないでしょ」
「それはそうだけど。目的なかったから今若奥様描いてんだよ」
「豊久、本当にこのままでいいの？」
良いはずない、いくらなんでも豊久だってそう思っているだろう。私は目線を豊久から外して、テーブルの上のグラスを見つめた。
白い水面がわずかな光を反射する。

「土方でもやるよ、そのうち。そしたら」
「そしたら？」
「とりあえずこの手も少しはごっつくなるな」
私は豊久の節の細い指を見つめる。
「指細いよね。女の人みたい」
「周りの女の手の方がよっぽどごつかったよ」
私は自分の指を見つめた。豊久の指とは大差ない細さだった。
「デッサン力ないって言うけど、俺の彫った型紙見たことあるだろ」
「だけどあれ、下手じゃん」
私はそう言って居間を出て行った。どうしてせっかくの才能を無駄にしているのだろうか、私には理解できなかった。あるいは本人が気付いてないのだろうか。いずれにせよ、私は豊久に嫉妬しているのだな、と思った。
私は着替えの入った鞄をもって豊久に一言だけ告げて出て行った。

私は吉原を通る時、どこか後ろめたさを感じてしまう。誰だってこのピンクの灯に覆われた街を通れば妙な罪悪感を汲み取ってしまうのかもしれないが、私の場合通りがかりの車にまで笑みを投げかけてくる、その笑みに耐えられないのだ。Ｊａｐａｎｅｓｅ　Ｏｎｌｙと書かれた文字の下に無数の笑顔は佇んでいた。私はなるべく何も考えないようにして、３２９へと抜けた。

私は本屋の夜勤をしている。時給６９０円。とてもとても楽な仕事だ。誰かが読みたがっている本のバーコードを読み取って表示された料金を受け取ればよい。本の整理や店内の清掃もあるけれど。ベージュのエプロンを着けてカウンターに立つ。一応横には夕方から働いている専門学校生の又吉君もいる。ファッション関係の学校に通っているらしい。茶色いメッシュの入った髪の間から幾つもの銀色のピアスが覗いている。シフトの関係上週に一度しか会わないが、それを抜きにしても又吉君とはほとんど話をしたことがない。

「お客さん少ないっすね」

「そうね」

この一時間で交わした会話だ。又吉君との会話よりもカウンターに置かれていく本を見ている方が楽しい。

「週刊少年チャンピオン」「リアル鬼ごっこ」「月刊・寝ながら聴けるモーツァルト」「亜熱帯琉球の植物」「小学四年生」「よくわかる北欧家具」「携帯彼氏・上」「バンド一本！巻くだけダイエット」「思想」「Ｐｏｐｔｅｅｎ」「赤本確定版・弘前大学」「くっすん大黒」

あっと言う間に午前一時を回っていた。誰に言われるでもなく、私は店内の掃除を始めた。

「石川さんお疲れ様っす」

「お疲れ又吉君」

スタッフルームにいた他の店員にも別れを告げて、私は店を後にした。カーステレオに携帯電話を繋ぐ。柔らかなピアノが流れる。

私はこれから何処に行こうか迷っている。まだ午前二時半だった。適当に市内を走ってみた。市だというのに街灯すらない真っ暗な道もあった。私はホームレスすら寝ていない公園に辿り着いた。誰もいない夜の公園に一人、佇む。鎖の錆びきったブランコに乗りながら。かつてはここに城があったという、今は跡形もない。星も月もない、街の明かりも霞んでいる、この夜に溶けてしまいたい。

私は眼を瞑った。

私の願いを遮るように白い軽ワゴンが公園の入口の私の車の前に停まった。軽妙なリズムのレゲエが流れ出ている。

「えっ、君もしかして暇？」

窓が開き下品な声が発せられた。合わせるようにステレオの音量が絞られていった。

「とっても忙しいです」

「またまたぁ～。寂しそうな顔しちゃってさぁ。どっか行かん？」

この軽薄そうな男はその「寂しさ」を癒せるとでも思っているのだろうか。

「一人になりたいので他の人を探して下さい」

「またまたぁ～。こんな時間に君以外いないよぉ。どお？どっか遠くに行こうよ。へへっ」

でーじにりーくるそーかやー、不意にそう思った。

「あいっ、あ～？あたしばしかして？ふぁさりんどぅや」

「あっさびよ、でぇじやっさ。なんでわったーがこんなあびられんといけんわけ？わったーなん

か山内の幹部よ」
「知らんしぇ、幹部ってなんね、青年会？なんの幹部かも言わんでふらーかと思われるよ。いやふらーのくせして誤魔化してから、あっさ本当救えないね」
「いやそっちこそそんなして座ってるから待ちんぼかとおもわれるって」
「はぁっさ、わぁが待ちんぼぉ？ばーきーに見えるって？しなさりんどぅ」
「あいっ、もう話にならん」
白い軽ワゴンは猛スピードで、そして大音量で走り去って行った。
私は始めから話す気なんてない。死んだおばあちゃんからやながらみぃする男はひたすら罵れ、と教わったのを実践したまでだ。

私は結局豊久の作業場についた。豊久の家や琢磨の家を行ったり来たり、落ち着く家なんて有りはしない。明け烏、というか烏ではないけれど小鳥のさえずりがチラホラと聞こえてきた。そろそろ日も昇る、再びどうしようもない日々がやって来る。私だってこれからどうすれば、何をしていけば良いかなんてわからない、ただ一刻も早くここから脱出したい。とても息が詰まる、この街の空気と相まって、もう窒息しそうだ。そしてここに甘んじていられる自分にも腹が立つ。ガチャっと立てつけの悪い戸を思いっきり開けた。何も逃げはしなかった。代わりにいびきが響く。ギシギシと床を踏みしめた。居間では豊久がとても気持ち良さそうに眠っている。寝ている間だけは幸せだろうか、案外悪夢ばかり見ているのだろうか。その内、私も目を開けたまま夢を

見られるようになるのだろうか。居間の中心には原稿が散らかっていた。ネームは完成しなかったのだろう。別にそれでもいい、無理して何かを作らなくても無理して生きていかなくっても。世間や社会に意地を張って立ち向かわなくても、淡々と生きていけばいい。誰かにそう言って欲しいんでしょ。原稿が一枚だけ、机の上に置かれていた。文字が書き殴られている。字面も中身も豊久らしかった。私は少しだけ嬉しくもなった。

はっ？中学生ですか？見ているこちらまで痛々しく感じる文面に親しみすら覚えた。今すぐここから立ち去ってあげようかしら、こわくないんでしょ。それともこの汚らしい紙に、パチンコ屋のチラシの裏に、火を点けて消してしまおうかしら、何もかも。だけれども私はそのどちらもしなかった、出来なかったのかも知れない。

愛なんてこわくないから。

菅谷　聡（すがや・そう）／教育学部島嶼文化教育コース三年次

講
評

第三回びぶりお文学賞　講評

仲程　昌徳

選考委員に回されてきた作品は「Anonymous」「君だけの部屋」「鉄砲百合の骨」「愛がこわい」「霧が晴れたら―ニライカナイの絵」「終わりの日」の六編。

六編を通読して驚いたのは、その半数にあたる三編―「Anonymous」「君だけの部屋」「霧が晴れたら―ニライカナイの絵」―が、いわゆる常識としてある普通の世界を取り扱ったものではなかったということであった。「Anonymous」に登場する、殺された人たちの身体の一部を組み合わせて作り上げられた人物、「君だけの部屋」に描かれた「人にくっついて、共に生きながら、頭の中にちょっとしたささやきを吹き込む」存在、そして「霧が晴れたら―ニライカナイの絵」の少年に話しかける自転車といったように、言ってみれば一種の怪奇、分身、擬人化を用いた作品が半数を占めていた。

創作は、いわゆる何でもありの世界である。何が描かれていても驚くほどのことはないが、選考委員に回されてきた作品の半数が、そのような作品であったのにはさすがに驚かざるを得なかった。

怪奇、分身、擬人化その他何であれいいが、読む者を、その世界に引き込むには、相当の力量を要する。三編のうち、読ませるものがあったとすれば、「Anonymous」だろう。母親による連続殺人の動機が、子供を復活させるためであり、殺された人たちの身体の部分を組み合わせてよみがえった子供は、自分が何者わからない、といったホラー仕立てになっている物語は、解体に瀕したアイデンティティの危機を秘めた寓話になっていたからである。

「君だけの部屋」「霧が晴れたら―ニライカナイの絵」のそれぞれに登場する「ウィスパー」そして「自転車」も面白くないわけではないが、その現出する場が、あまりに手垢の付いた、といった言い方が悪ければ、あまりに語られすぎている出来事で、新鮮さに欠ける恨みがある。沖縄の戦後史を彩る米軍関係事件や学園

風景を生き生きとしたのにするのには、思いつきだけではだめなのである。それを生かす、ちょっと変わった切り取り方が必要なのである。

語られすぎている出来事ということでは「終わりの日」の事件などがそうだろう。しっかりした構成で感心したが、話題になった飛行機事故という題材で損をしたといっていいし、なによりも、読めてしまうものになっていた。

読めてしまうことを逆に用いたというと少し褒めすぎになるが、「愛がこわい」の合わせ鏡にした手法は、その伝である。男女それぞれの視線から、同じ場面を取り上げていったのは、同じ状況を、同じように見ているわけでないという、全く当然のことを、平然と書いてのけたのである。俗っぽさが鼻に付くのだが、場所や職業の選択そして言葉使いにかけて、そのことを計算したふうにもみえるということで、ある程度成功しているといっていいだろう。平成のフリーター気質をねらったのはいいが、決して趣味がいいというわけではない。

趣味がいいということでは「鉄砲百合の骨」に良質のものがあった。

鉄砲百合をめぐる物語は、戦争や習俗を背景にして語られていくが、それは時間の流れを、所々で止める形をとっていた。すなわち現在と過去を交互につないで物語が進行していく、オーバーラップの手法がとられていた。そして、その手法は、大切なものが、時の移ろいのなかで、微妙に変化していくことを浮かびあげるのに有効であった。難点をいえば、曾祖母、曾孫をつなぐ流れや洗骨風習に関する点が上げられようが、なによりも幼稚っぽさがめだった。

選考委員はそれぞれの作品の長短をあげながら六編から三編を残した。討議を続けたが、決定的な作品をあげることができず、三編ともに佳作とした。次作を期待したいという応援の意をこめてのものである。

（前琉球大学法文学部教授）

第3回びぶりお文学賞　講評

山里　勝己

「Anonymous」（大谷凜）

大学教員のブラウンは、ふとしたことで知り合った緑色の眼をした不思議な少年の正体を探ろうとして、調査を始める。その少年の身体からはなんとも言いようのない臭い（じつは死臭）が漂っている。やがてブラウンはアリソンとその息子ジョンの不幸な人生を知ることになる。死亡したジョンをアリソンが魔術で生き返らそうとしているが、すでに息子の身体は腐敗してばらばらになりかけいる。最後は地下室の火事の中でアリソンとジョンが焼死する。炎の中でそこだけ腐敗せずに残っていた息子の緑の眼が輝く描写が印象的だ。

ブラック・マジックやゾンビ、そしてその謎を解明しようとする（大学の）研究者という組み合わせは、すでに多くの読者には見飽きたパターンであろう。ただ、この書き手は筆力があり、作品を構成する力量は評価に値する。母親と息子の関係をもうすこし書き込んでわかりやすく描写していたら結末の炎のシーンはより衝撃をもって読者に伝わったであろう。タイトルとプロットがうまくつながらないのも不満だ。この作者が、このような作品ではなく、日常のできごとを書いたらどのような作品ができるのだろうかとふっと思った。そのような作品を読んでみたいと思わせる力量のある書き手である。

「君だけの部屋」（具珉成）

一人称の語りである「僕」は、主人公明日香の「ガーディアン」（守護神）のような存在であるが、それを「僕」はあえて「僕」自身を「ウイスパー」と呼んでいる。この作品は、「ウイスパー」の視点から、明日香やその友人陽菜や二人に意地悪する男子生徒の黒木の関係を描いている。陽菜や黒木にも「ウイスパー」が

いて、それぞれの性格を反映し、ウイスパー間の会話や葛藤があるのは発想としておもしろい。
ただ、作品全体が「ウイスパー」のモノローグのようになっていて、「僕」の観察が平板なのが物足りない。読者惹きつけるには、「僕」自身が魅力的な語り手になり、読者に興味深い物語を語らければならない。

「鉄砲百合の骨」（小山響平）

主人公のキヨは曾孫のいる女性。そのキヨ自身の一人称の語りと、三人称の語り手によるキヨの描写が交互に組み合わされて構成された作品。
キヨ自身が語る幼年期の記憶は印象深い。兄と遊んだ海辺の描写、キヨの一生を見守るかのように咲き続けるテッポウユリ、兄の洗骨の描写などは叙情に溢れ、この作品を魅力あるものにしている。作者の才能を感じさせるところでもある。
問題は、語りの手法であろう。一人称と三人称を交互に繰り返す語りの方法を書き手は自ら納得した上で選択したのであろうか。語りの方法を作者自らがきっちりと詰めていないために、作品に混乱が生じているのである。特に、死後のキヨが語り手として登場するところは、発想としてはおもしろいが、このような語りの方法は読者を混乱させる。
力のある書き手だと思う。自作に期待したい。

「愛がこわい」（菅谷聡）

売れない漫画家の豊久とそのアシスタントをしているマキの視点から作品が書かれている。豊久は常にその日常の退屈さや不毛にいらつき、憤っている。
マキはすべてに達観しているように見えるが、じつはこころの奥深くいまの生活と自らの人生に絶望してい

る。そのような二人が漫画の題材を求めて、ポルノ映画を観に行く。その待ち合わせの場面から、その日の一日が終わるまでを書いた作品。

二人の視点から作品が構成されているため、同じ出来事が微妙なズレを見せながら描かれる。豊久の語りもマキの語り口も簡潔で明快だ。特に、現代の若者の鬱屈した姿が、スラングやウチナー・ヤマトグチを交えてパンチの効いた語り口で語られ、読者を退屈させないところがこの作品の最大の魅力。そして、同じ出来事を異なる視点から描くことで、人の微妙なすれちがいやポリフォニックな視点のおもしろさを示したところは大いに評価したい。

あえて、注文をつければ、せっかくのポリフォニックな視点による語りが深みを欠いているため、受賞作とするには物足りないということであろう。この書き手も力があると思う。自作に期待したい。

「霧が晴れたら――ニライカナイの絵」（奥田博之）

ガジュマル家の家族、言葉を話すゼネラルモーター社製の古ぼけた自転車アイザック、戦争で死亡した摩文仁の亡霊などが登場する作品。ニライカナイ神話、沖縄戦、人の生死の問題などがたっぷりと織り込まれた作品。いずれも重要なテーマであるが、どちらも抽象的な議論が先行し、具体的に描かれたエピソードに乏しい。特に、人の言葉を話す自転車の存在は容易には納得しがたい。また、ニライカナイの絵を見て、亡霊が驚愕する描写があるが、読者にもその驚愕や衝撃の意味が伝ってほしいと思う。

つまり、小説は、ニライカナイという神話に言葉で踏み込み、新たなイメージを創造することが期待されているということである。全体がばらばらな印象があり、なにか一つでもいいから柱となるプロットがあれば、作品全体が引き締まったであろう。ただ、この書き手の発想の大きさには今後大いに期待したいと思う。

「終わりの日」（赤崎晟一）

よく知られた「東京発大阪行きジャンボ機墜落」に題材を得た作品。作品に付された五つもの「参考文献」にも見られるように、これはすでに語られ尽くされた題材。若い書き手がこのような手垢のついた題材にどのような斬新な洞察を新たに付け加えようとしたのであろうか。

文章や構成に破綻はないが、構成やプロットそのものが既視感にまみれたもので、作品としての魅力は感じられない。自らの言葉や想像力で新たな物語に挑戦して欲しい。

（琉球大学法文学部教授）

「第3回びぶりお文学賞」選評

喜納　育江

今回は六篇の作品（「Ａｎｏｎｙｍｏｕｓ」、「君だけの部屋」、「鉄砲百合の花」、「愛がこわい」、「霧が晴れたら―ニライカナイの絵」、「終わりの日」）が最終選考に残り、その中から三篇が佳作受賞作に選ばれた。六篇に対する私の評価は僅差だったが、安定した文章表現力と構成力で物語の面白さをきちんと伝えることができている三作品が、結果的に審査員三名の票を集め、佳作受賞に至ったのではないかと思う。

「Ａｎｏｎｙｍｏｕｓ」は、ミステリーとオカルトの要素を交えることによって、最後まで読者の興味を惹きつけるストーリーの展開に「巧さ」が感じられる作品である。ただ、物語の結末において、「真実と現実」というこの物語の全体を貫くテーマがどの程度炙り出されているかという点ではやや物足りなさを感じる。

なぜ物語るのか、その物語の意味はどこへ向かっていくのかなど、深遠なテーマを執拗に追求していく姿勢も今後の創作の視野に入れてみる必要はないだろうか。その点で、「終わりの日」は、物語の設定そのものにいまひとつオリジナリティが欠けるという理由もあって受賞には至らなかったものの、「被害者と加害者がその事件にどう折り合いをつけるか」という複雑で難しいテーマに臆することなく取り組んでいるところが評価できる作品だった。

「Ａｎｏｎｙｍｏｕｓ」と同様、もうひとつの佳作受賞作の「愛がこわい」も、物語やテーマの深さというよりは、技法の斬新さや物語の娯楽性が特徴的な作品であるように思われる。登場する若者たちの率直で気取りのない言葉遣いが、会話に生き生きとした印象を作り出しているところに好感がもてた。ただし、同じ出来事を異なるジェンダーの視点から異なる物語として語るというこの作品がとったシンプルな構成については評価が分かれるところだろう。男女の感性や言葉の差異をどのように表現するかという表現方法の模索が尽きることはない。その意味で、ジェンダーと言葉の問題は、これからも色褪せることない文学的テーマであるように思われる。

テーマの深さと構成力や描写力のバランスが安定していると私が感じたのは、「鉄砲百合の骨」だった。物語の中心にあるのは、晩年に人生を振り返る主人公キョの静かで穏やかな語りである。幼少期に病死してしまった優しい兄の物語、戦争、そして夫の死という経験を通して見える、人間の普遍的な営みとしての「死」について語るキョの一人称の声を「縦糸」とし、時代の移り変わりと共に変化する社会や自然環境、そしてキョの人生を客観的に見つめる第三者の声を「横糸」として織り込んでいく物語全体のデザインは巧みである。「洗骨」や「風葬」から「火葬」への移行に象徴される人間の風習の変容、タカサゴユリに侵食されていくテッポウユリの生態系という自然の変化の中で、「テッポウユリは追いやられたのではなく、タカサゴユリと交雑し、似て非なるユリになってしまった」が「暗い林の中で懸命に咲いていたあのテッポウユリの白さだけは、

忘れないようにしようと思った」と、変容に抵抗するキョの芯の強さと同時に、「己だけは焼かれたくない」という恐怖に揺らぐ胸中も描くところにこの作者の筆力が感じられる。しかし、結末の場面はそれまでの緻密な筆致とは不釣り合いなほど陳腐な印象を与えてしまっており、もう少し工夫があってもよかったように思われた。

選考に直接関係することではないが、今回は、最終選考に残った六篇の作品のどれもが「死」をモチーフとしていたことが印象的だった。若い人の感性で綴られたそれらの「死」の形は、多様でありながら、そこに不快な軽さや未来への絶望感はなく、むしろ「生」の躍動感を当然の日常とする若さゆえの死生観のようなものが反映されていて興味深かった。あらゆる物語には哲学的な重さや深さが内在する。「自分の言葉で書く」という行為を通してそのことを体感してみるのも表現者の成長にとっては不可欠なのかもしれない。自分にしか語れない物語とはどのようなものか、それをどのように語るかという課題と併せて、例えば「死」といった重厚なテーマに取り組むうえで、自分の言葉がどこまで通用するかというような課題にも怯まずに挑戦してみてほしい。

（琉球大学法文学部准教授）

第三回びぶりお文学賞選考経過

第三回の応募作（募集期間二〇〇九年五月〜十月末）は十四編であった。この数は昨年に比して減数、多数の応募を期待したが、残念な数であった。学部ごとの応募は次の通り。

法文学部七編／教育学部二編／理学部三編／医学部一編／大学院理工学研究科一編。また学年ごとの応募は、一年次＝二名、二年次＝三名、三年次＝四名、四年次＝三名、大学院二年次＝一名、留学生一名、であった。

応募作から一次選考を行い、次のとおり候補作六編を選出した。（学部順）

「Anonymous」（大谷凜・文学部人間科学科四年次）、「終わりの日」（赤崎晟一・法文学部人間科学科一年次）、「君だけの部屋」（具珉成・法文学部交換留学生）、「愛がこわい」（菅谷聡・教育学部島嶼文化教育コース三年次）、「鉄砲百合の骨」（小山響平・理学部物質地球科学科物理系二年次）、「霧が晴れたら―ニライカナイの絵―」（奥田博之・理工学研究科物質地球科学専攻二年次）。

この候補作について、十二月四日に選考会で審査を行った。今回は残念ながら、受賞作無し、佳作に「鉄砲百合の骨」、「Anonymous」、「愛がこわい」という結果になった。この中から受賞作が、と思ったが甲乙つけがたいとの評価だった。

応募数は落ちてもインパクトのある作品があることを願ったが、いまひとつの出来というか抜きん出た作品が出なかったのである。佳作受賞の三名が第一回（大谷）、第二回（小山、菅谷）の佳作受賞であることは偶然か。応募作品のなかには日常的な素材を題材にしたものが多かったが、あいかわらず雑記的な文章の域を出ないものが多かったのは残念であった。しかし、物語を創造しようとする創作意欲のある学生がたしかに多数に存在するということがわかったので次に期待したい。いまの時代の空気を感受して個や世界の根源を描写するようなテーマに果敢に挑戦し創作の一線を切り拓いていく作品を期待したい。

（松原敏夫・琉球大学附属図書館びぶりお文学賞担当）

第3回 琉球大学

びぶりお文学賞

原稿募集

君も未来の芥川賞作家

本学はこれまで2名の芥川賞作家を始め文学各界で活躍する人材を多く輩出してきた大学です。文学活性化をさらに図るため平成19年度に創設したびぶりお文学賞を今年も募集します。
現代を切り開く意欲的な作品をお寄せください。

本学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出する。

募集〆切 ➡平成21年10月31日
発　　表 ➡平成21年11月30日（予定）

受賞作1編　海外旅行（20万円相当）
　　もしくはノート型パソコン（同）
佳 作 3 編　1編につき図書カード5万円分

第1回受賞作　あおい海の目で（山原みどり・国際言語4年次）
第2回受賞作　蓮花の故郷（竜　彰・医学科4年次）　※年次は受賞当時

［選考委員］仲程昌徳（国際沖縄研究所＜沖縄文学研究＞）／山里勝己（法文学部教授）／喜納育江（法文学部准教授）

応募要領

●ジャンルは小説とする 。
●応募資格
　本学の学生（大学院生、留学生を含む）。
●応募方法
　・一人　1編
　・応募原稿は未発表作品に限る。（同人誌などにすでに発表したものは選考の対象外とする。）
　・原稿枚数は、1ページ30字×40行、17枚（400字詰め原稿用紙50枚相当）以内。A4版横長用紙にタテ書き、10ポイントのワープロ文字で印字する。
　・必ず通し番号（ページ番号）を入れても肩を閉じる。
　・必ず1枚目にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
　・原稿の末尾に、住所、電話番号、氏名（本名）、学部・学科（大学院の場合は研究科）、学年を付記する。
　（個人情報は応募に関する 連絡以外には使用しない）
　・応募原稿は返却しない。
●送付先および問い合わせ
　琉球大学附属図書館情報サービス課（担当：松原）　〒903-0214　沖縄県西原町千原1番地
　電話　098-895-8697　　mail：toshio@lib.u-ryukyu.ac.jp
●受賞作品は、図書館報「びぶりお」と図書館ホームページに掲載する。
●事業の主管部局　附属図書館　：ホームページ　http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp

第三回琉球大学びぶりお文学賞作品集

発行日　二〇一〇年三月一日
編　集　琉球大学附属図書館
発　行　国立大学法人琉球大学
〒九〇三―〇二一四
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地
印　刷　株式会社　近代美術

2009 年度　国立大学法人 琉球大学

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号